12
593

始

露光量違いの為重複撮影

71-593

朝鮮

薄田泣菫著

大正
8.7.12
内交

立文社版

露光量違いの為重複撮影

71-593

新茶話

薄田泣菫著

大正
8.7.12
内交

文圭社版

この書をわが悲しきたましひに

序

『後の茶話』以後、最近に到るまで、大阪毎日の紙上に書き續けたものの中から、壹百五拾篇だけ選りぬいて集めたのが本書です。

著者

目次

獨逸帝國の豫言……一
飯を安く食ふ法……六
人間の大小……一〇
婦人と多妻主義者……一一
下腹で猫が啼く……一四
珍らしい廣告……一七
生命の勘定……一九
慈善家の心得……二三
大阪の道路……二五

落錢を拾ふ樂み……二八
フォッシュ將軍と葉卷……三一
黴菌を飲むだ化學者……三三
胃の鼾……三七
獨帝の拳骨……四〇
首を繋ぐ法……四二
天國に結婚のない理由……四五
名醫と後藤新平男……四七
タフトとお菓子……五〇
俘虜紹介狀……五三
大臣の顔觸……五六

接吻か二十弗か……五九
十六人の女房……六一
俳諧師の頓智……六四
結婚祝ひ……六六
寄附金の請取……七〇
原敬氏と鯛の盆……七二
骸骨の議員……七五
新發明書物消毒法……七八
三人牧師……八一
鼻……八四
敵と踊る……八七

博士と小學生徒……八九
卵を一つ……九二
顯微鏡の寄附……九四
愚堂の日本料理談……九六
停車場の演說……九九
花嫁を忘れる……一〇一
子役の粗忽……一〇四
人相見……一〇七
桃の實……一一〇
十二種の新聞を讀む小僧……一一四
仲麿と背中合せ……一一六

幸運兒……一二〇
船醉……一二三
木伊乃……一二四
氣取屋の婦人……一二七
老人の忠告……一二九
煙草屋の小僧……一三三
豚に脫帽す……一三五
女顚形の心得……一三八
賣子娘……一四一
悟道……一四四
入場料の儉約……一四七

塵頭と花形俳優……一四八
詩人の健啖……一五三
女商人……一五五
女房の手紙……一五八
女房の通辯……一六一
詩人の握手……一六四
百圓札……一六八
お祖母様と黒猩々……一六九
婦人記者……一七三
知行取……一七四
三哩の言語……一七八

林檎の寃罪……一八〇
名香大内山……一八二
各國元首の收入……一八五
木堂と湖南……一八七
話題……一九〇
五十仙の損失……一九二
戀病ひ……一九五
苦力と料理人……一九七
鳳治郎のお上手……二〇〇
獨帝への進物……二〇三
酒造禁止法案……二〇六

文豪の娘……二〇九
婦人運轉手……二一三
歌の師匠……二一五
海洋自由問題……二一九
鏡……二二三
運……二二四
獵自慢……二二八
音樂家の大統領……二三〇
瘸寬襲名……二三三
三弗で……二三六
穿き違ひ……二三八

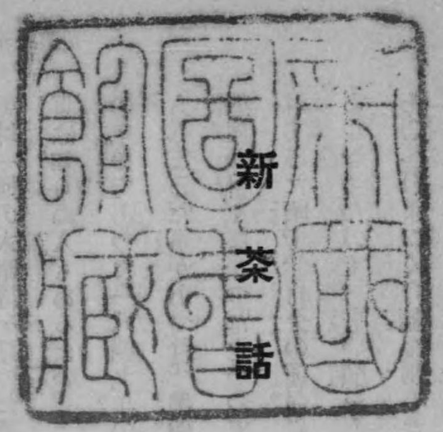
國旗に接吻……二四一
吸ひ殼……二四五
馬の慈善……二四八
國務卿祕藏の聖書……二五〇
文豪の顰つ面……二五二
觀樹老の嘘……二五五
英國首相の恐縮……二五八
法隆寺の覆藏……二六〇
蠟マツチ……二六三
新近江八景……二六五
捕虜た景品に……二六八

僞書……二七〇
牛の價……二七四
吝嗇の競爭……二七六
勞働者としての鼠……二七八
嗇の接吻……二八〇
靴の修繕……二八二
七十二歳の下士官……二八六
子供の少い村……二八八
食事の流義……二九一
帽子……二九三
農夫の自慢……二九六

無題二つ……二九八
菓子を舐め過ぎて……三〇一
武部源藏の嗇……三〇三
花の香氣……三〇三
何故食物が高い？……三〇八
齒と愛國と……三一〇
肉代五弗也……三一三
愛國心と胃の腑……三一六
女の顎髯……三一九
名と文句……三二一
馬は美容に害あり……三二三

冒險小說……三二五
居士と大姉……三二七
獨身主義者……三二九
梅の下かげ……三三三
將軍の舅……三三四
魚を食ふ人……三三八
婦人の病氣……三四〇
學校長……三四三
米隱し……三四六
馬を煽ぐ女……三四九
鼠に嚙まれた英雄の心臟……三五二

溫室……三五四
名女優の冷笑……三五七
應擧の蕎麥屋……三五九
豆腐と英國人……三六二
豆腐後日譚……三六六
地獄の住民……三七〇
汗……三七二
佛國領事……三七五
吝ん坊……三七六
パルザック……三八〇
勇智仁……三八一



新茶話

薄田泣菫著

寺か女か……三八四
豆本その他……三八六
狸と猿……三八九
豆猿……三九〇
猫と四斗俵……三九二
お茶盗人……三九四
貧民視察……三九七
二十五仙……四〇一
白髪……四〇四

○獨逸帝國の豫言

乾坤一擲の大賭博を打つた獨逸皇帝の祖父さんが、ウイルレム一世である位の事は知らぬ人もあるまい。この人がまだ普魯西王フレデリキ・ウイルレム四世の皇弟であつた一八四九年のある秋の日、御微行でライン河の河つ縁をぶらぶらしてゐた事があつた。佛蘭西の二月革命から飛火した伯林暴動に對するその態度が善くなかつたといつて、ウイルレムは方々から盛んに不評判を浴びせられてゐた頃で、自分の運命に、いつかまた芽が吹かうかなどとは夢にも思つてゐなかつたので、暗い顔をして黄ばんだ森影を歩いてゐた。

そこへひよつくり顔を出したのは、ジプシイの占ひ女で、蒐色の顔を皺くちやにして、

「陛下、御運を見させて戴きませう」と言つてお辭儀をした。

「陛下」と聞いて、ウイルレムは少からず喜んだ。

「陛下つて、どこの國のだい。」

「申上げる迄もありませんさ、新しい日耳曼帝國のね……」

と占ひ女はにやにや笑つて返事をした。

ウイルレムは幾らか眞面目になつて來た。

「そんな帝國がいつ出來るな。」

ジプシイの女は紙片を取り出して、拙な文字でその年の一八四九年へその數字をそれ〴〵書き加へた。

1849
1
8
4
9
―――
1871

「御覽なさいまし、こんな數が出ました。してみると一八七一年だと見えますよ。」

實際その通りで、日耳曼帝國が出來上つたのは、一八七一年だつた。

ウィルレムは身體を乘り出すやうにして訊いた。

「ぢや、其の帝國を乃公は幾年位治めるだらうね。」

占ひの女は、紙片でまた勘定を始めた。以前と同じやうに一八七一年へ、その數字をそれ〴〵書き加へながら。

```
1871
   1
   8
   7
   1
―――
1888
```

「ちよいと、こんな數になりましたよ、これで見ると陛下の御治世は一八八八年までといふ事になりますわね。」

實際ウィルレム一世の崩くなつたのは、その一八八八年であつた。

皇帝はジプシイの女がてきぱきと返事をするので、幾らか調弄氣味になつて訊いた。

「そして其の帝國はいつ迄續くだらうな。」

「さやうでございますね。」

と女はまた勘定をし出した。一八八八年へ、その數字をそれ〴〵つけ足しながら。

```
1888
   1
   8
   8
   8
―――
1913
```

「こんな數が出ましたよ。」

とジプシイの女は相手の眼の前へ1913といふ數字を突きつけた。

皇帝はその數字を見ると、ふふんと鼻で笑つて往き過ぎたさうだが、一九一四年に始まつた今度の大戰爭が、獨逸帝國を、みじめな破滅に持つて往つたのを思ふと、ホオヘンツオルレルン家の最後の治世は一九一三年だつたといふ事になるのである。

飯を安く食ふ法

米が高くなつて、世間が騒々しくなつて來た。この食糧品の暴騰から來る生活難を濟ふには、朝鮮米を行き渡らせるのもよからうし、方針を過つた役人達を農商務省の椅子から引きずり下すのもよからうが、今一つそれよりもずつと良い方法が殘つてゐる。

話は古いが、德川四代將軍の頃、阿部豐後守忠秋が老中を勤めてゐた事があつた。豐後守といへば、江戸市中に棄兒があれば、屹度拾つて養育した程の慈悲深い男だつたが、それでも時々は剽輕な惡戯をして、友達を調弄ふ程の心の餘裕は持つてゐた。

ある日の事、豐後守は自分の同僚大久保忠成が大きな辨當箱を持つて來てゐるのに氣がついた。

「忠成め、飛んだ食ひぬけと見えるて。」豐後守はそつと其辨當箱に觸つてみた。箱は鎧櫃ほど持ち重りがした。「怖ろしい重みだな、こいつをこつそり食べて置いて、どんな顏をするか見てゐたら面白からうて。」

かう獨語を言ひ〳〵、四邊を見まはしながら、そつと其の辨當を盜み食ひした。やつと食べてしまつた後では、腹は大名を鵜呑みにした蟇のやうに膨れてゐた。暫くすると、忠成はひよつくり其處へ顏を出した。恰ど時分時なので、默つてそこにあつた辨當箱を取り上げた。そして蓋を開けたと思ふと、急に變な顏をしてじつと內部を見てゐたが、暫くすると氣もない顏で、

「今朝方あまり食べ過したものか、どうも食氣がなくて困る。」

と呟き〳〵、そつと元々どほり蓋をして、辨當箱を側に押しやつた。

豐後守は可笑しさを嚙み殺して、忠成を相手に何かと世間話をしてゐた。話してゐるうちに、忠成の返辭が段々氣乘りがしなくなつて來るのも可笑しい事の

一つだつた。暫くすると、忠成は「今日は屋敷に用事があるので少し早引をする」と言つて慌てゝ下つて往つた。豐後守は其の後姿を見送りながら腹を抱へて笑ひこけた。

夕方豐後が邸に歸つて、用人を相手にその話をすると、用人ははたと膝を叩いた。そして、

「なる程さう承はつて初めて解せました。」

と言つて、獨りでくすくす思ひ出し笑ひをした。豐後が理由を訊くと、先刻忠成は道の通りがゝりに、腹が空いて困るから、湯漬なりと振舞つて欲しいと言つて、座敷に上り込み、主人も、家來も、負けず劣らず大食をして歸つた後だと解つた。豐後守は夫を聽いて舌打をして殘念がつた。

米が高くなつたら、道の通りがかりに湯漬の食べられる良い友達をそこらに拵へて置く事だ。しかし良い友達は良い狗ころよりも少いものだ。仕方が無かつたら老中でも友達にするさ。

人間の大小

今度の戰爭で、聯合軍側の大立者は、何といつても英國首相ロイド・ジョウジ氏を第一に推さなければならぬ。その大立者のロイド・ジョウジ氏が威爾斯生れの身長の低い、漸と五尺そこそこの小男だとは知らぬ人が多い。

昨年の春だつたか、ロイド・ジョウジ氏が南威爾斯のある都市へ演說に出掛けた事があつた。無論戰爭に關する演說で、自惚好きな英國人が、首相の口から直接獨逸文明の、安物の外套のやうに、裏は襤褸つ切であるのを聽くための催しであつた。

其演說會の司會者といふのは、大のロイド・ジョウジ崇拜者で、この政治家の試みた演說は、どんな詰らぬものでも、みんな新聞を切りぬいて手文庫へしま

つて置くといふ風の男だつた。だが、これまで一度も自分の崇拜する人に出會つた事がなかつたので、其の日は朝から胸をわく〳〵させて待つてゐた。

會場には聽衆がぎつしり詰まつてゐた。當日の演說家を案內して、會場へ入つて來た脊の高い司會者は、先づ起つて、この名高い政治家を聽衆に紹介はしたが、そのなかに次ぎのやうな言葉があつた。

「私はふだんから斯の偉人を崇拜して居りましたが、正直に申しますと、身體のもつと大きい、見掛けの堂々たるお方だとばかし思つてゐましたので、今日初めてお目にかゝつて、實は驚いたやうな始末で……」

次いで起つたロイド・ジョウジ氏は、小さいが、しかし胡桃のやうなかつちりした體軀を演壇に運んだ。

「唯今承はりますと、今日の司會者は、私にお會ひになつて、甚く失望せられたやうな御容子で、誠にお氣の毒に堪へません。」と首相は脊高の司會者の方へ皮肉な目つきを投げた。「だが、今承はつて初めて氣づいたのは、吾々の生れた北威爾斯と此方とでは、人間を測るのに、標準が異つてゐるといふ事で、南威爾斯では、人間を頤から下の大きさで測るらしいが、私共の北威爾斯では反對に頤から上の大きさで大小を定める事になつてゐるのです。

恁う言つて、ロイド・ジョウジ氏は、自慢の大きな頭を肩の上で揮つてみせた。聽衆は譯もなく嬉しがつて、頤から下の馬鹿に大きい體軀を搖ぶつて喝采した。

婦人と多妻主義者

米國のユウタァ州は、人も知つてゐる通り、モルモン宗の本山があるところだけに、そこには鷄のやうに女房をたんと引連れた人達も少くない。

このユウタァ州選出の上院議員に、スムウトといふ男がゐる。先日紐育市のある會合で、紐育生れを何よりの自慢にしてゐるある婦人に出會つた事があつた。

婦人はスムウト氏がユウタア州の生れだといふ事を訊くと、寡婦の雌鷄のやうにぐつと反身になつて近づいて來た。

「スムウトさん、一寸伺ひますがお國には一人の殿方で、奥さんをたんとお持ちの方が、隨分ゐらつしやるさうですが、眞實なんですか。」婦人の言葉には、胡椒のやうな皮肉な處があつた。が、人交際の上手なこの上院議員は別に厭な顏も見せなかつた。

「眞實ですよ、奥さん。」

「失禮ですが、あなたも其のお一人なんですか。」

婦人は寡婦鷄のやうに、伸びかかつた蹴爪で、おとなしい上院議員を跳ね飛ばしかねないやうな素振を見せた。

「仕方がありませんよ。奥さん、實は土地の習慣で、私の故郷ではさうしなければならない事情があるのです。」

上院議員は剝り立ての顏を撫でながら、目で笑ひ〳〵言つた。

「事情つて、どんな事情なんです。」

婦人はきめつけるやうな調子で訊いた。

「いえね、恁うなんです。奥さん方のやうな紐育婦人が――」上院議員はにやにや愛嬌笑ひをしながら言つた「紐育生れの御婦人が一人して持つてらつしやる色々な美點は、故郷の女では三人四人集めなければ得られないからなんですよ。」

「まあ、お世辭のい、事……」

紐育生れの婦人は、カナリヤのやうな聲を立て、笑つた、そしてその一瞬間、この上院議員に限つて、三百人女房を持つても一向差支ないと思つたらしかつた。

○下腹で猫が啼く

むかし小野淺之丞といふ少年があつた。隣家の猫が度々大事な雛つ兒を盗むので、ある日築山のかげで、吹矢で猫を狙ひ討にした。猫は額を射られて、後ろ足で衝立ち上つて、二三度きりきり舞をしてゐたが、その儘ばたりと斃れて、辭世も何も詠まないで死んでしまつた。

氣の小さな淺之丞は、死樣のむごたらしさを甚く氣に病むでゐたが、その翌る日から自分の腹のなかで、猫の啼き聲がすると言ひ出した。ある時は胸元で、またある時は臍の邊で悲しさうな聲がするので、淺之丞は生きた氣持がしなかつた。

淺之丞には伯父が一人あつた。伯父といふものは借金を拵へたり、戀病に取つ憑れたり、猫に祟られたりする甥にとつては、少くとも一人は無くてならない

實用品なのである。伯父は言つた。

「士の兒が猫に祟られて病死でもしたら、い、耻晒しだ。いつそ切腹して果てたがよからう。」

淺之丞は眼に涙を一杯溜めて伯父の顔を見た。下つ腹のあたりでまたしても猫が啼いたやうに思つた。下つ腹といへば、つい五六日前までは「武士道」と「孟子」との相住居をしてゐた大事な場所であつた。

淺之丞は伯父に勸められて切腹する事になつた。兩親にもながの暇乞をして、やがて肌を脱いで、刀を手に取つた。介錯役に側に突立つてゐた伯父は落ついた聲で呼びかけた。

「慌てるではないぞ。折角の切腹ぢや。猫の聲のする邊を目がけて、一思ひに腹に突立てるがい、ぞ。」

「はい。」と淺之丞は下つ腹を撫でながら、じつと聽耳を濟ませた。腹のなかで

は猫の啼き聲どころか、鼠一匹潜つてゐる容子も見えなかつた。

「今朝方までは確に啼いてゐましたつけが・・・・」淺之丞は臍のまはりを指先で押へてみた。「今は一向聞えません。」

「そんな筈はない、氣を落ちつけてよく聽いてみるがい、。」

淺之丞は身體ぢゆうを耳のやうにして聽き入つたが、何一つ聞えなかつた。

「一向に猫らしいもの、啼き聲は致しません。」

「猫め、それぢや逃げたかも知れんぞ。」伯父は聲を立て、からからと笑つた。

「逃たものなら仕方がなからう今更切腹にも及ぶまいて。」

甥は手帛のやうに眞つ青な顏をして、短刀を白木の鞘に納めた。猫の逃出た下つ腹では、いつの間にか「武士道」と「孟子」とが歸つて來て、蹇のやうに遠慮して、そつと溜息をついてゐた。

珍らしい廣告

倫敦タイムスの近刊號人事欄に次のやうな廣告が載つてゐる。

「私は結婚前の若い紳士ですが、私に結婚をすつかり思ひ止まらせて下さる先輩の方がいらつしやるなら、御近づきになりたいものです。」

これを數多い廣告のなかから拾ひ出した米國の雜誌記者は、奇妙な廣告だ、珍しい廣告だ、減多に見かけられない廣告だといつて矢鱈に吹聽してゐる。

結婚は惡い事ではないが、あいにく相手が要るので、兎角思ふに任せぬ事が多い。それに女の註文が段々高くなつて來るのは、男にとつて何よりも荷厄介である。ずつと以前は女といふものは、亭主が男でさへあれば辛抱したものだが今では天使でなくつちや迚も氣に入らない。ところが、多くの場合男は女にとつて天使どころか、牛のやうに鈍間で、おまけに牛のやうに獣物である。

男が女にとつて牛であるのと同じやうに、女は男にとつて蝙蝠である。謎である。多くの男は生れるときから、死ぬるまで女の爲に苦勞をしてゐるが、さういふ男でも、一生の間に少くとも二度はからきし女を理解し得ない時期があるものだ。二度といふのは、一度は結婚前で、一度は結婚後の事をいふのだ。

世の中には結婚したがつてゐる男も少くはなからうから、その人達のために言つておくが、諸君が獨身で通したからといつて、失望する女はまさか二人とはあるまい。よしんば失望したところで、その人達は直ぐ絶念められるに相違ない。ところが、諸君が結婚すると、一生涯失望し續ける人がある。その人は他でもない。細君である。

同じ時分、巴黒の「フイガロ」新聞に次のやうな廣告が載つてゐた。

「上流の家庭にある鸚鵡の發音が惡いのを直すために、正確な佛蘭西語の出來る教師を雇ひたい。」

斷つておくが、發音の惡いのは、上流家庭の夫人では無くて、夫人よりも口數の少い鸚鵡なのである。

鸚鵡に佛蘭西語の巧い教師を雇ふといふと、一寸見は贅澤なやうだが、鸚鵡に訛を喋舌らしておいて、じつと辛抱してゐるよりか、どれ程節儉につくか知れたものではない。佛蘭西に文學が衰へないのは、鸚鵡の訛を氣にしないではゐられない程、國民が國語に敏感なところも一つの原因になつてゐる。多くの代議士に狗のやうな日本語で喋舌らしておいて、默つて夫を聽く事の出來る日本人の無神經さが熟々思はれる。

生命の勘定

富ロスチャイルド男が、熱病にひどく苦しんだ事があつた。ちやうど男が七十五歳の折の事で、齢も齢だから老人自身も迚も助からないものと絶念めて、

「公乃も今度こそ愈々お暇乞だ。」

と、毎日のやうに溜息ばかり吐いてゐた。

お抱への醫者は、朝に晩にやつて來て、老人の脈を押へたり、咽喉を覗いたりした。咽喉を覗く折には、老人は野鴨のやうにあんぐり口を開けて仰向いた。すると醫者は叮嚀に兒終つて、

「いや、大した事はございません、程なく御全快になりませう。」

と、請合つたやうに言つた。だが、醫者の言葉通りにも往かないものと見えて病氣は重る一方だつた。

皮肉屋のトルストイは、死際に枕もとに立つてゐるお醫者達の顔をじろりと尻目にかけて、

「この人達は醫者の學問にかけたら、みんな知りぬいてゐるんだが、その醫者の學問といふ奴が、何一つ判つてないんだから困る。」

と吃したといふ事だ。だが、それはトルストイが無理なので、學問の餘り頼みにならないのは、何もお醫者のみに限つた事ではない。

病氣は重くなる一方だつたので、ロスチャイルドは床のなかで神經を針鼠のやうに尖らせて口癖のやうに「今度こそいよ〳〵お暇乞だな。」と呼き通してゐた。醫者は例のやうに叮嚀に診察をしたが、自分の診察の屆かないところは、お世辭を使ふ外には仕方がないといふ事をよく知つてゐたので、

「御前、大丈夫でございます、此御容體ぢや百歳までは屹度お請合が出來ます。」と言つて、てれ隠しにお辭儀を一つした。

「百歳まで、」名高いこの資本家は、夫を聞くとむつくり頭をもち上げた。「それは大變な損だよ、神樣がそんな御損な算盤をお持ちになるといふ法はない。七十五で取引の出來るものを百までも出すなんて……」

大事の自分の生命までを、戰時公債なみに取扱つてゐるは、いかにも資本家ら

しくて面白いが、夫よりも感心なのは神様の勘定だかいのを、ちやんと見ぬいた所にある。

○慈善家の心得

鎌倉の圓覺寺に、誠拙和尚といふ坊さんが居た。ある時三門を拵へやうとして、弘く佛縁のある人達から寄進を募つた。すると、その頃札差をしてゐた梅津傳兵衛といふ男が、心ばかりの寄附につきたいからといつて和尚を訪ねて來た。傳兵衛は膨まつた懐中から、嵩高な金包を取り出して、和尚の前に置いた。

「和尚様、ほんの聊かではございまするが、こゝに金子が五百兩ございまするから、今度の三門の御建立へ是非お如へおき下されまするやうに。」

和尚はちらと金包みを見たが、

「あゝ、さうかい。」

と言つたきり、直に眼を外つ方に逸らした。

傳兵衛は不平で溜らなかつた。五百兩といへばなか〳〵の大金で、これだけあつたら女一人の靈魂を買ふ事も出來るし、男の運を買ふ賭博をも打つ事が出來るのだ、それを知らない和尚でもない筈だ。と、傳兵衛は恁う思ひながら、態と覗き込むやうにして和尚の顔を見た。

「ほんのぽつちりでは御座りまするが、五百兩だけ御寄進申し上げまする。」

「さうか、よし〳〵。」

和尚はまた一言言つたきり、矢張り外つ方を向いて素知らぬ風をしてゐた。

傳兵衛は幾らか腹に据ゑかねた。幾ら出家の身とは言ひながら、他人から寄進を貰つて、あの素振は蟲が善すぎる。五百兩といへば、かなりの大金だ、自分がこれだけの金を儲けるには額に玉のやうな汗も流した。嘘も幾度か吐いたがそれを今惜氣もなく寄附しやうといふのだ。和尚はそのお禮として、來世で自

分に特別上等の居所を取持つてくれる程の信用はないにしても、今少し叮嚀な挨拶があつても善かりさうなものだ。と傳兵衛は少し言葉に角を立てた。

「和尚樣、五百兩と申しましたところで、當山におかせられましては何のお役にも立ちますまいが、私にとりましては、聊か身分に過ぎた寄進かと存じます。就きましては何か一言の御挨拶を下されましても……」

「禮が言つて欲しいと言ふのか。」

此方向きに向き直つた尚和の眼は、蠟燭のやうに光つた。

「御意にござりまする。」

傳兵衛は木兎のやうに頰を膨らませた。

「馬鹿な。お前が善根するのに、なぜまた俺が禮を言はんければならぬのか。」

和尚の聲は曳臼のやうに上から落ちかゝつた。その下に壓し潰されたお伽譚の猿公のやうに、傳兵衛は疊に顏をすりつけて眼を白黑させた。

そんじよそこらの慈善家もよく〳〵心得てゐて欲しいものだ。

大阪の道路

近頃の大阪市の道路ほどひどいものを自分はまだ見た事がない、少し雨でも降り續くと、道といふ道は、まるで糠味噌のやうに濘つてしまふ。すべて頭でも道でもよくするには、金が懸るものだと信じてゐる大阪人は、それでも默つて辛抱して、馬のやうに拔脚して、そのなかを歩き廻つてゐる。

十八世紀の初め頃、墺太利の維也納の市街が恰どそれで、雨降りの日にでもなると、道路は大ぬかりにぬかつて、市民は外へ出るのが憶劫でならなかつた。その頃の宰相はロブコウヰチ公といふ政治家で、ひどくそれを苦に病んで、幾度か市民あてに訓令を出しは出したが、市街はいつまで經つても少しも綺麗にはならなかつた。

宰相は一思案した。で、ある日の事、市長を官邸に招待した。蛙のやうに泥濘に住む事の好きな市長も、目上の人から招待される有難さは知つてゐた。その日になると、市長はしつくりと禮服を着込み、絹製の　韈　に、おろし立ての靴を穿いて、大威張りで出かけて往つた。

宰相はにこ〳〵顏で出迎へてくれたが、二言三言話してゐるうちに急に顏を曇らせた。

「今日は君とゆつくり落ちついて話したいと思つてゐたのだが急に差逼つた用事が起きたので、これから出掛けなくつちやならん。ついてはお氣の毒だが、私と一緒に馬車に乘つて途々用談を聞いてはくれまいかね。何ならお宅の前で車をとめるから、君の馬車は返したがいゝぢやないか。」

宰相の馬車に相乘が出來る事だつたら、市長は鞄となつても厭はない程だつたので、二つ返事ですぐ承知して、自分の馬車は先へ返した。そして大めかしに

めかし込んだ姿で、宰相の側に腰をかけてゐた。宰相は途々馬や、お天氣や、英吉利の政治家の噂などそんな下らない事ばかり話して、用談らしい事は一向曖にも出さなかつたが、馬車が維也納でも名うての汚い町へ入つて來ると、急に慌て出した。

「これは怖ろしく汚い道へ出た。すつかり道を間違へたものと見える。氣の毒だが君には下りて貰はうぢやないか。もう約束の時間に間も無いのに、これからまた後がへりをしなくちやならないんだからね。」

市長は馬車の扉をあけて外を見た。町は泥田のやうにぬかつてゐた。市長は自分の禮服を見、絹の　韈　を見、おろし立ての靴を見て泣き出しさうな顏になつた。

「これぢや、迚も歩けさうにありませんから、も少し先きまで御一緒に願はれますまいか。」

「それは可かん。何分時間が差逼つてゐるんだから。」

宰相はきつぱりと跳つけた。

市長はすつかりあきらめたらしく、いきなり馬車を飛び下りた。そしてこのやうな恰好をして泥濘のなかを泳ぎ廻つた。宰相は馬車の窓から夫を見おろして聲を立て、笑つた。

お蔭で、それから暫くすると、維也納の市街は見違へる程立派になつた。大阪の市街に困つてゐる人達よ、一度雨降りの日に自動車の窓から池上市長や市會議員やを泥濘のなかに投り出してみたらどんなものだらう。理窟よりも實物教育の判り易いこの人達だけに、案外効があるかも知れない。

落錢を拾ふ樂み

世の中に何が嬉しいといつたつて、途で落したお鳥目が自分の手に還つた時の

氣持ほどいゝものはございません、お上人樣は御存じでいらつしやいますか。」

恁ういふ話を良寛上人にしたものがあつた。上人は言ふ迄もなく、越後國上山の五合庵に棲むでゐた名高い禪僧である。

この話をした男だつて世の中には外にもつと嬉しいことがたんとあるのは知つてゐるらしいが、行ひ澄ました良寛に、そんな話も出來なかつたものだから、精々落したお鳥目位で濟ます事にした。

良寛は夫と聞くと、不思議さうな顏をした。そして汚れた巾着から散錢を二つ三つ取り出して、態と道の上に落した。お鳥目はかちんと音を立て、上人の脚もとで二三度くるくると舞つた。

良寛は手をのばして其の散錢を拾つたが、格別變つた氣持もしなかつた。

「一向嬉しくない。何うしたもんだらう。」上人は呆けた顏をしてじつと考へ込んだ。「もつとたんと落さなくちやならないか知ら。」

先刻から上人の素振を見て、馬のやうににや〳〵笑つてゐた男は、一寸小腰をかゞめた。「お上人さん今一度試てみて下さい。さうしたら屹度お判りになるだらうと思ひます。」

良寛は巾着に入れかけてゐた散錢を取り出して、また道の上に落した。散錢はお上人に當てつけたやうに、其邊をころころ轉げ廻つてゐたが、いつの間にか草のなかに潛り込むで、そのまゝ姿を隱してしまつた。

良寛は手を延ばして、そこらを捜し廻つたが、お鳥目は一向顏を見せなかつた。僧侶さんはうろたへ出した。禿た頭を唐茄子のやうに眞つ赤にして、草のなかを搔き分けてゐたが、暫くしてやつとこさで見つかつた。上人は汗ばんだ顏を持ち上げた。

「なる程嬉しかつたよ。ほんとに嬉しいもんだな、落した錢を拾ふといふものは。」

フオツシユ將軍と葉卷

當今聯合軍での大立者といつたら、十人が十人まで佛蘭西のフオツシユ將軍だといふのに異存があるべくもない。その將軍に多くの人と異つた一つの癖がある。

癖――といふと、荒つぽい日本の將軍達に少しでも近づきを持つてゐる人だと直ぐと口を尖らせて、

「それは屹度、厩のかへりに馬を撫でたその掌面で、夫人の頰桁を思ひきり擲しつける癖なんだらう。」

と言ふかも知れない。それも一つの立派な癖には相違ないが、フオツシユ將軍のは、そんな風なのと少し違つてゐる。

將軍の癖といふのは葉卷の喫かし方で、將軍は今度の戰爭が始まつてから、今

日になるまで、たつた一本の葉巻しか喫かしてゐない。といふと、どんな正直な人でもが、

「たつた一本の葉巻だつて。戯談言つちやいけない。戰爭が始まつてから今日までもう幾年になると思つてるのだい。」

と腹を立てるかも知れないが、實際將軍はたつた一本の葉巻しか持つてゐないのだから仕方がない。

その一本の葉巻を將軍はいつも口に啣へてゐる。食事の時は叮嚀に卓子の上にそつと夫を置き、食事が濟むと、またそれを啣へてゐる。恁うして朝起きるとから、夜分寢床に入るまでその同じ葉巻を啣へ續けてゐる。尤も一度だつて、その葉巻に火を點けた事はない。將車の言ふのでは、この人は生れてから今日までまだ一度も火の點いた葉巻を喫かした事はないさうである。

「火の點いた葉巻からは烟が出る。私は烟には堪へられない。」

將軍は軍人にしては少し上品過ぎる顏をしかめて、言ひ言ひしてゐる。

葉巻といへば、米國では引續いて三代も葉巻一つ喫かさない大統領が續いてゐる。

ルウズヴエルト

タ　フ　ト

ウ　キ　ル　ソ　ン

いづれもが揃ひも揃つて烟を好かない人達である。

黴菌を飲むだ化學者

學者や藝術家といふ輩には、自分の研究や作物やに熱中し出すと、つい自分をも、世間をも忘れてしまふやうな人がよくある。況して晩飯や借金の事などは。

歴史家のモムゼンはさういふなかでも、一番よく物忘れをする人だつた。

ある日の事、モムゼンはいつものやうに書齋へ入つて、何か調べ物をしてゐた。ちやうど時分どきになつたので、下男は料理をもつて入つて來たが、主人の歷史家は唯もう仕事に氣をとられて、一向食事の事なぞ考へてゐないらしかつたので、下男は側の卓子の上に皿を置いて下つた來た。

暫くして、下男は二皿目を持つてまた書齋に入つて來た。先刻の肉汁は匙もつけないで殘つてゐたので、代りに次の皿をおいて、前のはその儘下げて來た。

そして料理部屋で舌鼓を打ちながらこつそりそれを食べた。どんな場合にも盜み食はうまいものであるが、とりわけ學者が氣むづかしい顔をしてゐる隣りの室でする盜み食はまた格別のものである。

下男はまた三皿目を持つて來た。歷史家が羅馬大帝國の事に頭をつかつてゐる間に、二皿目のビフテキはもう冷えきつてゐたので、下男はそれをも下げて、次の室で食べてしまつた。

それから物の二時間も經つと、モムゼンが疲れたやうな顏をして臺所へ入つて來た。

「おい、もう時分どきを大分過ぎてゐるやうだが、まだ午飯は食べさせないのかね。」

「午飯ですつて。」下男は態としらばくれた顏をして笑ひ出した。「まあ、旦那樣とした事が、お午飯は先刻召しあがつたばかりぢやございませんか。」

「えつ、もう食べたつて。さうかなあ。」とこの偉大な歷史家は兩手でもつてぺこ〳〵になつた横つ腹を押へてみるらしかつたが「なる程さう聞いてみると食べたやうだわい。うん、食べた〳〵、確にお午飯は食べた。いや、飛んでもない事を言つて濟まなかつたよ。」

歷史家はほんとに濟まなかつたやうに頭を掻きながら、また書齋に歸つて往つた。

バスツウル研究所の創設者ルイス・バスツウルは名高い化學者だつたが、この人もモムゼンと同じやうに、どうかすると自分を忘れる性であつた。ある時娘の家に往つて、櫻實を饗ばれた事があつた。娘は木の實を入た籠と、水を盛つた丼とを卓子の上に置いた。

「阿父さん、これ拗り立ての櫻ん實なのよ。埃や毛蟲の卵がくつ着いて、もいけないから、一粒づゝこの水で洗つて召しあがれよ。」

「うむ、よし〳〵。」

老つた化學者は娘の言なり通り、さくらんぼを一つ宛鄭寧に丼の水で洗つて食べてゐたが、暫くすると籠のなかは空つぽになつた。すると化學者は手を伸ばして丼を取上げた。そしてそれを唇に持つて往つたと思ふと、なかの水をぐつと一息に飲み干してしまつた。埃も、黴菌も、毛蟲の卵も。

胃の腑

むかし松平不昧公が、京都に上つた時、ある日の事、茶人千宗佐を訪れやうとして、前もつて其の由を通じておいた。宗佐は相手が不昧公だといふので、色色趣巧を凝らした午餐の用意などしておいた。――一體茶人の料理といふものは、味よりも趣巧のもので、趣巧さへ氣に入つたら、お膳のものは言ふに及ばず、皿を食べ、椀を食べ、おまけに亭主役の禿頭を食べたつて少しの差支もないのだ。

不昧公は千家へ往く途中で、急にその日は大德寺に寶物の蟲干がある事を思ひ出した。

「さうだ、蟲干を觀に往かう、宗佐へは歸り途にしたつて遲くはあるまい。」

と、不昧公は先きに大德寺の方へ廻る事にした。蟲干には色々珍らしい物があ

つたので、この風流大名は思はず時を過した。寺の門を出たのは午も大分過ぎてゐて、べこべこになつた胃の腑のなかでは、先刻蟲干で見た吳道子の觀音さまや、一休和尚の木像やが空腹さうに欠伸をしてゐた。

千家では、また宗佐が欠伸ばかりし續けてゐた。不昧公が着いたのは、欠伸が中つ腹と變つてゐた時なので、前々から凝した饗應の趣巧も、すつかり臺なしになつたゐた。亭主はお客を茶席へ通すと、薄茶を一服出しておいて、素知らぬ顏をしてゐた。腹の空いた大名は、次の室の物音にじつと聽耳を立てゐたが、別段膳部を用意するらしくもなかつた。

不昧公の胃の腑は深く宗佐を怨んだ。これまで空腹といふ事を知らなかつた大名の頭腦は、急に胃の腑の味方をして、何かしら復讐の趣巧を考へゐらしかつた。

その翌る年、不昧公は江戸の邸へ宗佐を招いた。宗佐は名高い大名の折角のお

招きだといふので、出來るだけ供をたんと連れて、供には挾み箱や長刀なども擔がせた。そして大威張りで海道筋を練歩かせたものだ。

不昧公は江戸の邸で遙にその噂を聞き傳へた。胃の腑はいつぞやの復讐の時が來たのを思つて小躍りした。不昧公は用人を呼んで、何か知ら言ひつけた。用人は急いで品川の宿まで出掛けて往つて、茶人の一行を待ち受ける事にした。

仰々しい宗佐の行列が來かゝると、松平家の用人は爲斯のやうに表へ飛んで出た。そして不昧公からだといつて、大きな金包みを宗佐の鼻先きに突きつけた。

「折角お招きは致したが、殿は俗腹のお手前はもう厭になつたと仰せらるゝによつて、お氣の毒ではござるが、こゝからお歸り下さるやうに。」

恁う言つて、用人はさつと引揚げてしまつた。宗佐は化かされたやうな眼つきで、いつまでも其の後姿を見つめてゐた。

何事も胃の腑から起きた事だ。胃の腑からはどんな事でも起きるものだ。

獨帝の拳骨

戰爭になつてからは、然う暢氣な事も出來ないが、伯林の市中では、いつも大晦日の夜は、市街を歩く人達が、出合頭に誰彼の容捨はなく、いきなり拳を固めて帽子の頭をぽかりと擲りつける事が流行る。

今の獨帝は人一倍この遊びが好きで、皇帝の位に卽いてからも、大晦日の晩になると、こつそりお忍びで市街へ浮れ出し、擦れ違ひざまに他人の隙を見てはぽかりと擲りつけたものだ。

誰彼の容捨なく、他人の帽子を擲りつけるといふのは、年中頭ばかり下げて暮してゐる人達にとつて、實際胸の透く遊戯に相違なからうが、獨帝のやうに、朝から晩まで內閣の大臣達にお辭儀をさせ通しにさせてゐる者は、もつと他の遊びを好いてもよかりさうなものだ。

しかし獨帝は好きな事をするのに、誰に遠慮は持たない性分である。その上一つ間違つたら、相手から自分の帽子を擲りつけられるといふ心配があつてみれば、獨帝は何うしても此の遊びを捨てる譯に往かなかつた。

ある歲の大晦日の晩、獨帝はいつものやうにお忍びでこつそり市街へ飛び出した。明るく灯の入つた市街には、自分の頭を庇ひ立てるやうにして、尻目に他人の帽子を覗つてゐる人達がうよ〳〵してゐた。獨帝は急ぎの用事でもあるらしい顏面で、其なかに紛れ込んで往つたが、擦れ違ひざま牛のやうな呆けた顏の男を見ると、いきなり拳をあげてぽかりと帽子を叩きつけた。

その瞬間、獨帝は眞靑になつて、帽子から拳を引き外した。見ると、白い手首に眞紅な血がたら〳〵と流れてゐる。獨帝は恨めしさうに其の男の帽子を覗き込むだ。帽子の山からは釘が二三本頭を覗けてゐた。其の男は釘仕掛を發見られると、慌て帽子を脫いで小脇に抱へ込むだ。そしてセルロイド製のやうな禿

頭をふりふり霜菜に紛れ込むだ。

獨帝はぶつぶつ呟きながら宮城に引きかへした。そして侍醫の鼻先に血だらけな拳骨をぐつと突き出した。侍醫は叮嚀に繃帶をした。

首を繋ぐ法

和蘭のアメロンゲンの城に落ちのびた前の獨逸皇帝は、近頃頻と何か書き物をしてゐるといふが、その書き物は何であるかといふ事は、誰一人知つた者もない、しかも此の人が粗疎がましい隱し立などしないで、あけすけに、公然に今度の戰爭の事情を懺悔したら、どんなに面白い書物が出來るだらう。歐羅巴の外交家達は、その懺悔錄の前で、眞つ赤になつて馬のやうに鼻を鳴らしたり、狗のやうに取つ組合を始るに相違ない。

そのむかし、獨逸にシュレエッエルといふ外交官があつた。時の宰相ビスマ

ルクに睨まれて、だしぬけに休職といふ辭令を請取つたので、强て平氣な顏をして宰相に挨拶に往つたものだ。宰相は肥つた體軀を椅子にもたせて、何か善くない事を考へてゐたらしかつたが、この休職外交官を見ると、急に撫へたやうな愛想ぶりを言つた。

「君もやつと閑な身體になつたといふのだが、これから何を爲るね。」

「さあ、何を致しませうね。」外交官は落つき拂つて返辭をした。「當分はまあ宅に引込んで、回想錄でも書くんですね。御存じの通り、私も長らく官海にゐたものですから、隨分いろんな事を見聞してまゐりましたよ。夫れを一つあけすけに書いて見たらと思ひましてね。」

ビスマルクは鷲のやうな怖い眼つきをして、じつと客人を見つめた。この外交官はその頃名うての筆まめな男で、勢みに乘るとどんな皮肉を書き出すか判らなかつた。物もあらうに、回想錄とは、聞く身にとつて如何にも氣持が惡かつ

た。

「回想錄もよからうが、玆で一つ君に相談があるんだがね。」ビスマルクは椅子から心持乘り出して來た。「今米國公使の椅子が空いてゐるんだが、君は往つてくれないか知ら、往つてくれると實に都合がいゝんだ。」

「參りませう。さういふ思召でしたら、なに回想錄なんか何時でもいゝ事なんですから。」

外交官は二つ返事で直ぐ承知した。二人は眼と眼を見合はせてにやりと笑つた。

前内閣の閣僚なぞも、役人を止めた所在なさに、一つ回想錄でも書き出してはどんなものか知ら、間がよくば、そんな事は後廻しにして、大使にでも往つてくれと、誰が賴むまいものでもない。

天國に結婚のない理由

結婚といふ事は、人間のする仕事のうちでは、あまり立派なものではない。那は賭博や編物と同じやうに、外に何も仕事のない時にするほんの閑潰しで、歌を詠むとか、畫を描くとか、そんな結構な仕事を知つてゐる人達にとつては、結婚なぞ成るべくしない方がいい。だから、基督も天國では「娶らず、嫁かず」だと言つてゐる。天國のやうな結構づくめなところでは、結婚は賭博と一緒に御法度となつてゐるのだ。」

說敎家としては、米國で第一人者と言はれたビイチャアが、ある時敎會でお得意の說敎をした。說敎はいつに異らず面白く出來たので、ビイチャアは上機嫌で敎會を出やうとした。

すると、それまで出口に衝立つてゐた妙齡の美しい娘が、一寸會釋をしてこの

説教家を呼びとめた。

「先生、ちよいとお伺ひ致しますが――」娘は嬌へたやうな身振をした。「天國には結婚が無いやうに福音書に書いてありますが、あれは眞實なんでございませうか。」

ビイチャアはじつと娘の顔を見つめた。娘はチョコレエトよりも、お芝居よりも、一番「結婚」が好きらしい口もとをしてゐた。

「眞實ですよ。天國には結婚なんてものはありません。」

「何故でございます。」娘は此の世で結婚をした上に、天國でも今一度結婚したさうな口風で訊きかへした。

「それは、何でせう――」と牧師は皮肉な返事をした。「天國には女といふものが居ないからでせうて。」

天國には女が居ませんて――」娘は軍鷄の牝のやうに屹となつて顔をあげた。

「違ひますよ。先生、そんな理由で天國に結婚が無いんぢやございますまい。」

「ぢや、どんな理由で？」雄辯な牧師は覗き込むやうにして訊いた。

「それはね、恁うなんでございますよ。」と娘は石のやうな白い齒を見せてきつぱり言つた。「天國ではお嫁入しやうにも、肝腎の式をあげて下さる牧師さんなんて方は、一人も居ないからなんでせうよ。」

名醫後藤新平男

男爵石黑忠悳氏は、今では茶人らしく十德を着込んで、お茶を啜つたり、若い者の嫁を捜したりして、日を暮してゐるが、實をいふと、氏はあれで軍醫總監なのである。尤も氏自身も自分が軍醫だつたのは、夙くの往時に忘れてゐるらしく偶に人が醫者の話でもすると、氏はまだ見ぬ地獄の取沙汰でも聞くやうに、變な顔をして耳を傾けてゐる。

こないだの事、あるところに宴會があつて、石黒氏も尖つた頭で夫に列席してゐた。氏のすぐ次ぎに肩を並べて坐つてゐたのは、世間のいふ成金の一人で、魚のやうな青白い顔に、魚のやうな圓い眼をした男だつた。その男は自分の上手に坐つた禿頭が石黒氏だと知ると、懐中から大きな名刺を取り出して、石黒氏の膝の上に置いた。

「私は恁ういふ者でございますが、先日中から一度あなたにお目に懸りたいと存じまして……」

その男は叮嚀に頭を下げた。石黒氏は慌て、眼鏡を取り出して名刺を讀んだ。名刺は手帛ほどの大きさに見えた。

石黒氏は眼鏡越しに相手の魚のやうな顔を見た。

「いや、お初めて。何か御用でもおありかな。」

「はい一度お閑の節に女房の御診察をお願ひ致したいと存じまして……」その

男は圓い眼を忙しさうに瞬きした。「こないだぢうから肋膜を煩ひまして、方々の先生方に……」

「駄目だ〳〵。」石黒氏は相手の鼻先で大きな掌面を揮つた。病身な成金の女房位だつたら、一思ひに絞殺されさうな大きな掌面である。

「乃公に診て貰はうと思ふには、生命が二つ無くちやならんが、夫は御存じだらうな。」

「へえ、生命が二つ？」成金の男は不思議さうな顔をして考へた。だが幾度考へてみても、自分の女房は乳房と良心とを二つ宛持てゐる代りに、生命はたつた一つしか持つてないらしかつた。

「驚いたらうな、生命が二つ要るんぢや。」石黒氏はにやにや笑ひながら言つた。

「だが、こゝに一人生命が三つもなくつちやとても診て貰へない醫者がゐる。貴公は其の人を御存じかな。」

「いえ、存じません、どなたでいらつしやいます。」

その男は魚のやうな目であたりを見まはした。

「あすこに居る、那の鯱子張つた男だ。」

石黒氏は床の間に近く坐つてゐる刈髯の男を指さした。見ると男爵後藤新平氏だつた。

タフトとお菓子

米國の前大統領タフト氏は、法律事務でよく旅をするが、旅先きで滅多に故障に出會つた事もなく、おまけにいつの旅立にもお天氣が多いので、「乃公ほど旅の間が好い者はなんとあるまい。」

と、あの大きな圖體を搖ぶつて、ひとりで嬉しがつてゐる。

最近に西の方へ汽車旅行をした事があるが、其の時何うした間違か、鐵道に故障があつて、汽車は寂しい田舍町に停つたまゝ、前へ進まなくなつた。

「乃公が乘込んでる汽車だ、こんな筈は無いんだがな。」

と、タフト氏はぶつ〳〵吃きながら、動物園の獸のやうに大きな顏を列車の窓から出して、其邊を見まはしたが、ビスケットの空鑵のやうな小つぽけな停車場には、タフト氏の好きな神樣なぞ居ようとは思はれなかつた。

タフト氏は大きな旅鞄を提げて、のつそり列車のなかから出て來た。そして停車場前の薄汚い旅籠屋に尻を落ちつける事にした。線路の修復はかなり手間が取れるので、汽車は明日の朝までは迚も出さうになかつたからである。

入つて來た旅籠屋の亭主はお客の大きな圖體を見て、變な顏をしたが、その名前を聞くと、慌てゝ叮嚀にお辭儀をした。そして名高い前大統領に一夜の宿を貸す事の出來た自分の仕合せを心から喜んだ。

其の次ぎの瞬間、亭主は自分の家に持合せの寢臺が、いづれも安物づくめな、

脆こい出來であるのを思ひ出して、當惑さうな顔をした。で、早速の氣轉で、お客の重みで寢臺が押し潰れないやうに、鐵線でもつて、方々を蜘蛛の巣のやうに絡めにかゝつた。

夜があけて、タフト氏が朝餐の席につくと、亭主は揉み手をしながら御機嫌伺ひに出て來た。

「檀那樣、いかゞでございました。よくお寢みになられましてございましたか。」

「有難う。いや、よく眠れたよ。」と前の大統領は何だか思ひ出し笑ひをするらしく、顔を歪めた。「だがの、今朝眼がさめて自分の寢相を見ると、乃公の身體が寢臺の外に食み出してゐて、まるでワッフル（お菓子）のやうだつたよ、はゝは、……」

人間は時々自分をナポレオンやソクラテスに比べるやうに、お菓子や眼藥の壜にも比べてみる必要がある。自分がお菓子に似てゐるなと思ふのは、英雄に肖てゐると思ふよりも、何うかすると心強い感じを與へるものだ。

俘虜紹介狀

英國の陸軍將校をたんとぶち込んでゐる獨逸の俘虜收容所に、一人の軍曹があ る。神信心の深い方で。

「汝の敵を愛せよ。」

と言つた耶蘇の言葉を文字通りに取つて、氣の毒な俘虜を並外れて勞はるところから、いつとなく其處にゐる人達と懇意になつて、毎朝顔を見合はすと、仲のい、友達のやうに、につと笑ふ程の間になつた。

ある朝の事、軍曹は洋袴の隱しに兩手を挿し込んだ儘、妙に悄氣た顔をして入つて來た。それを見た俘虜の一人が訊いた。

「何うしたい、ひどく減入つてるぢやないか。」

「いよ〳〵お別れが來ました、二三日中に貴方方と別れなくつちやならんかも知れん。」軍曹は狗のやうに悲しさうな眼つきをして言つた。

理由を聞くと、自分はいつ迄も收容所にゐて、氣の毒な敵を愛したいのだが、今度愈々戰地へ送り出されて、前線へ立たなければならなくなつたといふのだ。

「僕は戰線へ立つと、屹度俘虜になるやうな氣がしてなりません。」軍曹は玩具の笛のやうな悲しさうな聲で言つた。「で貴方方に一つお願があるんですが、肯いては戴けないでせうか。」

「願ひといふと……」將校の一人が營養不良の顏を突出しながら訊いた。

「外でもない、紹介狀を書いて貰ひたいんです。俘虜になつた折の……」軍曹は言ひ難さうに賴んだ。「收容所にぶち込まれても、僕だけは成るべく別取扱ひ

がして貰へるやうに……」

英國の將校達は顏を見合せて笑つた。そして言ふ事が面白いからと言つて、早速英語の紹介狀を一通書いて渡した。軍曹は無論英語は讀めなかつたが、にこにこもので、幾度か禮を言つてポケットに押し込んだ。

軍曹は戰線へ出へると案の定蘇格蘭兵と戰つて俘虜になつた。そして將校の前へ引出されると、待設けてゐたやうに內ポケットから、例の紹介狀を出した。將校は不審さうに眉を顰めて、夫を讀み下してゐたが、暫くすると腹の底から搖り上げるやうに笑ひ出した。手紙には恁う書いてあつた。

「この男はLといふ軍曹です、惡い奴ぢやありません。別扱ひにして欲しいと言ひますから、一度に擊殺さないで、ゆつくり苛め殺してやつて下さい。」

大臣の顔觸

いよ〳〵原氏が内閣を組織した。閣員の顔觸もやつと定つた。政友會の領袖で、この顔觸に洩れた人達は、「原の白髪頭め、俺の事を忘れとるのか知ら。恁う見えても俺だつて立派な大臣級だ。」

と内々呟いてゐまいものでもない。

原敬氏がこの自惚を、どんな鹽梅に取扱ふかは見物である。これを巧く利用したものに徳川家康がゐる。ある時何かの席で、福島正則が家康にお追從を言つた事があつた。那の武骨者にお追從が不思議がる人があるかも知れないが、無骨者はよくお追從を言ふものである。

數多い御家來衆のなかで、井伊氏と本田氏と榊原氏とは、實に天晴の、武勇で、この三人こそは御當家の重寶かと存じまする。」

正則は恁う言つて、獸が媚びをする折のやうな眼をして家康の顔を見た。家康はその折もいつものやうに態とらしくにこ〳〵してゐる。

「然うぢや、右の三人は無論傑れては居るが」家康はいつもの癖で、硬ばつた掌面で輕く膝頭を叩いた。「しかし當家の重寶といへば、强ちこの三人には限らぬ、少く見積つても先づ十人はござる。」

「なに、十人と仰せられまするか。」正則は吃驚したやうに眼を一杯に睜いた。

「むう、確に十人はござる。」家康はその十人を革財布にしまつて、懷中に捻ぢ込むでゞもあるやうに、きつぱりと言つた。

「すりや、殘の七人は誰々でござりまするな。」

正則は木の株のやうな岩丈な膝を乘り出して來た、家康は狡さうな眼つきで、ちらと正則の容子を見てゐたやうだつたが、だしぬけに

「はゝゝゝ……」

と大聲をあげて笑つた。正則は何が何だか分らないで、馬のやうに鼻面をくしやくしやさせた。

家康の狸爺め、十人と言つて置けば、數多い家來達がいつか夫を聞き傳へて、

「あとの七人は誰々だらう――俺もその一人かな。」

と、めい〳〵で屹度武勇を勵むやうになるだらうといふので、態と恁うした人喜ばせを言つたのである。

原敬氏に敎へる。人が大臣選定の苦心でも訊いたなら、態と顏をしかめて、

「さうだな。今度ほど困つた事はなかつた。何しろ政友會には大臣級の人物がざつと四十七人もあるのだからね。」

と、言つておく事だ。四十七は赤穗義士の數でもあり、いろは文字の數でもある。その通俗な事にかけては、馬鹿者の多い政黨員にとつて、何よりも分り易い數字である。

接吻か二十弗か

メリー●ガアデン孃といへば、今は巴里に住んでる、米國で名うての首歌妓だが、ある時劇場の稽古場で、大事の寶を失くしてしまつた。一體劇場の稽古場といふところは、よく物を失くしたり、拾つたりするところで、坪内逍遙博士が一枚看板の女優を失くしたのも、島村抱月氏が大事な「戀」を拾つたのもみんな劇場の稽古場だといふ事である。

メリー●ガアデン孃が失くしたのは、戀でも母親でもなかつた。女優の身では何うかすると、戀よりも親母よりも大事にしなければならぬ筈の大粒の眞珠であつた。孃は血眼になつて搜したが、かいくれ分らなかつた。で、一座の者に申し渡しをして、眞珠を拾つてくれた者には、接吻か、二十弗か、どちらかをお禮にしやうといふ事に取り極めた。

「接吻がして貰へる……」

皆は熱病を患つた樣な眼つきをして、稽古場を搜し廻つた。すると、年の若い道具方の一人が、小道具のなかで件の眞珠をめつけた。女優はにこ〳〵ものでそれを受取て身につけた。

「有難う。お禮は孰方にした方が良いの。接吻？」女優は美しい眼で道具方の顏を見た。化粧石鹼でよく洗つた上に、香水でも振りかけなければ迚も接吻が出來さうな顏ではなかつた。「それとも二十弗の方にするの。」

「へ、、、……、手前接吻は大の好物なんでけすが……」道具方は、薇薔のやうな女優の唇を見て、狗のやうに卑しい眼つきをした。「でも、お腹には代へられやせん、二十弗の方を戴きやせう。」

それから二三日經つて、メリー・ガアデン孃は、富豪のアンドリウ・カアネギー氏に出會つて、この話をした。

「道具方め、若いに感心な男ぢや。」カーネギー氏は、美しい女優の唇にちらと眼をやりながら言つた。「二十弗受取つてみれば、この後接吻するにしても、精々大事にしませうからの。」

カーネギー氏は良い事を知つてゐるが、しかし道具方はもつと〳〵良い事を知つてゐたのだ。それは二十弗あつたら、接吻と、酒と、今一つ料理さへ味はふ事の出來る安値な世界がこの世の中にあるといふ事である。

十六人の女房

結婚といふものは、不思議なもので、一度で靈魂まで黑焦にしてこり〳〵するのもあれば、性懲もなく幾度か相手を更へて平氣でゐるのもある。ソロモンは一代のうち數へきれぬ程の女と緣を結んだといふが、あの通りの賢者の事だから、訊いてみたら色々面白い談話を聞かせてくれたに相違ない。

佛蘭西のボルドオにジエエムス・ゲイといふ男が住むでゐた。何一つ立派な仕事は殘さなかつたが、一代のうちに十六人の女房を持つたといふので、かなり世間の評判になる事が出來たのは、飛んだ幸福であつた。

ある物好きの男が、ゲイに會つて訊いた事があつた。

「そんなにたんと奥さんをお持ちで、よく飽きませんでしたね。私などはたつた一人しか持ちませんが、夫でも少し持ち過ぎたやうに思ふ事も度々ありますよ。」すると、ゲイは急ににこ〳〵して、

「滅相な。女は一人一人みな別物ですよ。一人で懲りたからと言つて、外の幾人もが然うだとは限りません。つまり女房をたんと持つのは、書物をたんと讀むと同じで、色々の知識を得るといふ事でさ。」

と答へたといふ事だ。

そのゲイ爺さんは百一歳の時、十六人目の女房に亡くなられて、こつそり十七

人目の後添を貰はうとしたが、親類緣者の者に留立されて、ぶつ〳〵呟きながら、漸く思ひとまつたといふ事だ。爺さんに取つてこれは面白い新刊小說を讀み損ねた氣持がしたに相違ない。

英吉利に十二人の女房と十三度結婚したといふ不思議な男がある。一番目の女房はその男を捨てゝ、若い戀人と駈落したので、男は涙を流してその女の噂ばかりしてゐたが、程なく二度目の結婚をした。そして次ぎから次ぎへと結婚と葬式とを繰り返して、十一人目のお葬ひを世したのは、丁度八十四の夏だつた。

それから爺さんは縹緻よしの寡婦婆さんと結婚したが、實をいふと其の婆さんは一番目の女房なので、婆さん自身は同じ男と二度目の結婚だとはよく知つてゐたが、爺さんは何にも氣づかないで、始終にこ〳〵してゐたさうだ。

俳諧師の頓智

いつの頃だつたか、一寸はつきり判りかねるが、長崎に素行といふ俳人があつた。ひどい行脚好きで閑さへあれば暢氣に旅に出歩いてゐた。そのむかし芭蕉は頭陀袋に杜詩と山家集と普門品とを入れてゐたさうだが、素行の貧しい、懐中には、いつも俳諧七部集が一册捻ぢ込んであるに過ぎなかつた。

ある時田舍道で日を暮らした事があつた。ちやうど冬の最中で、寒さは無遠慮に俳諧師の背筋から懐中から入つて來た。素行はべそを搔きさうな顏をして、野道を急いだ。すると、漸と一軒の百姓家が見つかつた。俳諧師は石のやうに冷い拳をあげて門の戸を叩いた。

戸はなかから開けられて、襤褸つ片のやうな皺くちやな媼さんが。闇のなかゝらうつそり顏を出した。

「旅の者でござる。申しかねたが、一夜の宿をお借り申したい。」

素行は木の葉のやうに寒さうに身體を顫はせた。媼さんは闇を透してうそうそ旅人の容子を嗅ぎ分けるらしかつた。

「坊さんかの。坊さんならお泊め申すほどにの。」

媼さんは口のなかで呻くやうに言つた。

俳諧師はそれを聞き逃さなかつた。

「さうとも〳〵。俺はその行脚坊主ぢや、坊主ぢや程によろしく賴む。」

早口に恁う言ひながら、媼さんに安心させるやうに頭巾を取のけて見せた。成る程頭は圓かつた。

素行は奥へ通されて、先づ佛檀の前へ坐らされた。媼さんは亡くなつた爺さんの回向が賴みたかつたのだ。俳諧師はてんで經文を知らなかつたので、ひどく當惑したらしかつたが、ふと氣づいたのは懐中の七部集であつた。彼は勿體ぶ

つた手附でこの集を取り出した。そして作者の名前を初めから順々と讀み下した。

「其角、嵐雪、去來、丈草、野坡、杉風、北枝、凡兆、支考……」

恁う言ひながら、時々思ひ出したやうに鉦を鳴らしたものだ。媼さんはお蔭で亡くなつた爺さんが淨土に生れ代つたもの、やうに涙を流して喜んだ。そして暖い粥と暖い夜着とを惠んでくれた。

これを讀んで、くす〳〵笑ひ出さない僧侶が今幾人あるだらう。彼等も皆同じやうな事をしてゐるのだ。

結婚祝ひ

ノオベル賞金の創設者として聞えた瑞典のアルフレッド・ビイ・ノオベルの邸に長年の間まめに女中頭を勤め通した女があつた。ところが、緣あつて他へ嫁く

事になつた。すべての女は、どんなまづい結婚でも、獨身よりはましだと思つてゐるもので、これは人生といふものに對して、どの女もが持つてゐる一番大きな誤解だが、この女中頭も矢張り夫を持つてゐたので、兎も角も結婚する事にきめてしまつた。

主人のノオベルはその話を聽くと、寢椅子から半分身體をおこしかけた。

「それは目出度いの、長年の間まめに勤めてくれたお前に出て往かれるのはつらいが、然し結婚と聞いては、强て引とめるわけにも往くまい。ところで、お祝ひだて――」と主人はにや〳〵笑ひながら、女中頭の顏を見た。これまでは女中頭として世界第一等の顏立のやうに思つてゐたが、今見ると、花嫁として一番やくざ者のやうに思はれた。「何かお祝ひにくれてやりたいと思ふんだが、何でもい、からお前の欲しいと思ふものを言つてみるがい、。」

女中頭はノオベル家のうちで欲しいものをどつさり持つてゐた。第一に主人の

財産が欲しかつた。第二に主人のフライ鍋が欲しかつた。第三に主人の寢椅子が欲しかつたが、そんなものは主人がなかなか「諾」と言ひさうになかつた。で、早速花聟の許へ驅けつけて相談する事にした。

花聟はそれを聽いて、美しい女中頭が、どつさり「幸運」を背負つて、自分の身體のなかへ潜り込むやうに思つた。

「何をお願ひしたものだらうな。」

「何をお願ひしたものでせうな。」

二人は頭をつき合はせて相談したが、漸と相談が取り極つた時には、二人とも素晴らしい仕事をしたやうに疲れてゐた。

女中頭は主家に歸つて來た。そしてもじもじしながら口を切つた。

「檀那樣、私どもの婚禮に祝つて戴きたいと思ふものが、漸と見つかりまして ございますが、眞實に祝つて戴かれますのでございませうか。」

「ほんとうだともさ。」恐ろしいダイナマイト製造業者は、女中頭の口から、お手の物の爆裂彈が吐き出されやうとも怯ともしないやうな身構へをして言つた。

「何でもいゝから、お前の欲しいものを言へと言つたぢやないか。」

「有難うございます。」花嫁は丁寧に頭を下げた。「それでは恐れ入りますが、檀那樣のお儲けになる一日分だけのお錢が戴きたうございます。」

「よからう。」と主人は二つ返事で直ぐ承知をした。「だが、勘定するのに少し手間が取れようて。」

實際勘定をするのに手間が取れた。それが爲めに十一人の書記が幾日か働かされた。そして女中頭は結婚祝ひとして二萬八千弗の金を渡された。

寄附金の請取

紐育の新聞記者フランシス・ロイブ氏が、先年亞米利加印度人の調査委員をしてゐた頃、ある日の事、見も知らぬ印度人が、其の事務室へひよつくり蒿色の燒栗のやうな顏を出した。そしてポケットから錢包みを取り出して、卓子の上に置いた。

「こゝに五十弗ありますから、お請取りを願ひます。」

印度人は恁う言つて反身になつた。その金は公用金としてロイブ氏が受取るべき筈のものだつた。

ロイブ氏はその金をあらためた。そして確に請取つた由を言つたが、印度人は何か待心でゐるらしく、兩手を胸の上に拱んだまゝ、卓子の前に立ち跨がつて、一向歸らうとしなかつた。

「何か外に用事でもあるのかね。」

ロイブ氏は燒栗のやうな顏を見上げた。

「請取證を待つてゐるんです。」

印度人は厚い唇のなかから吃くやうに言つた。

「何だつて請取證なんかが要るんだね。」ロイブ氏は口を尖らした。「君は私があとからまたこの金を請求しやしないかとでも思つてゐるのかい。」

印度人は肩を聳やかして言つた。

「私は耶蘇信者なんです、いつかは屹度神樣にお目に懸るでせうが、その折彼得は私を天國に上げる前に、此の五十弗の請取證を見せろといふに定つてゐます。その折請取證が要るからといつて、まさか地獄のなかを捜し廻る譯にも往きませんからね。」

「請取證を取るのに、何だつて地獄の中を捜し廻らなければならんのだね。」

ロイプ氏は不思議さうに訊いた。

「でも、貴方方が地獄に墮ちなくつて、誰が墮ちるんです。」

ロイプ氏は鐵瓶のやうに湯氣を立てゝ怒り出したが、それでも請取證を書くには書いた。印度人はそれを持つてのつそり出て往つた。

米の廉賣に寄附金を申し出た成金達よ、成るべくなら君達も請取證を取つて置いた方がよからう。然もないと、彼得が屹度ぐづ〳〵言ふに極つてゐるから。

原敬氏と鯛の盆

政友會總裁原敬氏が、最近北國遊説の途すがら、越中高岡の商品陳列所へ往つた事があつた。名士といはれる人達が、恁ういふ所へ出掛けると、記念のため何か購ひ取らなければならないのを原敬氏はよく知つてゐた。

羽織袴で、出迎へた陳列所の關係者達は、名高い政友會の總裁が、どんな素晴

しい買物をするだらうかと興味を持つて待設けた。事によつたら陳列所の品物全部を、根こそぎ買ひ取らうとでも言ひ出しはしなからうかとも思つて、内心びくびくものでゐた。

原氏は五人前一圓五十錢の煎茶々碗を買つた。一組二圓の吸物椀を買つた。硯箱、卷煙草入、灰落し……やくざな政黨員のやうな安物ばかり買取つた。そして正札三十圓と値段のついた七寶の花瓶が目につくと、まるで仲違ひの加藤高明氏にでも出會つたやうに、顔を反けてそつと通り過ぎた。

ふと欅の刳り盆が原氏る目にとまつた。夫は田舍の村長などの好きさうな鯛の恰好をしたもので二圓三十錢といふ札が付いてゐた。

「高橋君……」原氏は秘書役の高橋光威氏を振りかへつた。「あの盆を一つ買つておいてくれ。」

「盆でございますか、那の鯛の恰好をした……」高橋氏は變な眼つきをして其

の盆を見た。高橋氏は原氏の夫人から言いつかつてゐる事がある。夫は原氏が旅へ出ると、いつも無益な買物ばかりするので、成るべく側にゐて留め立して欲しいといふ事なのだ。高橋氏は頭のなかに、原夫人の險しい顏を思ひ浮べた。そこへのつそりやつて來たのは小林源藏氏だつた。小林氏は獵師のやうな眼付をして、一寸その盆を見たが、すぐ吐き出すやうに言つた。

「これは可かん。この鯛はまるで死んどる。」

「死んでたつて可いぢやないか。」强情な原氏は小林氏を尻目にかけた。「腐つても鯛といふ事がある。」

小林氏は行詰つたやうに、口をもぐもぐさせた。そこへ煎茶茶碗や、吸物椀や灰落しのやうな、安物の政友會代議士が五六人どやどやと入つて來た。そして鯛の刺り盆を見ると、てんでに言ひ合はせたやうに首をひねつた。

「これは可けませんね。幾ら何だつて總裁のお買物ぢやありませんよ。」

「それが輿論か……」原氏は髯のない口元をへし曲げるやうにして、皮肉な笑ひを見せた。「輿論なら仕方がない、それぢや買はない事にしやう。」皆は手を拍つて喜んだ。いつも總裁の言ふが儘になつてゐる彼等にとつては、こんな事で强情つ張りな總裁の言ひ分を捨てさせたのが何よりも嬉しかつたのだ。

だが、それは糠喜びであつた。原氏は夕方宿へ着くと、こつそり高橋氏を陳列所にやつた、そして態々件の鯛の刺盆を買ひ取らせて來た。高橋氏は原夫人の險しい顏を思ひ浮べながら二圓三十錢を仕拂つた。

骸骨の議員

カンサス出の米國上院議員に、インガルスといふ男がゐる。爪立ちしたら、天國にでも手が達きさうな背高で、おまけに酷い痩つぴいだが、それでも地面の事が氣になるかして、色々郷里の事に骨折るので、カンサスでは評判のい、男

である。

この男の近所に、大の仲よしのお醫者がゐる。インガルスとは打つて變つた肥えた男で、診察のひま〳〵には、靜な書齋でエマアソンの論文を讀むのが何よりも好きであつた。ところが、困つた事には、このお醫者がエマアソンを讀まうとすると、極つたやうに其處へ飛び込むで來て、邪魔立する者がある。外でもない、ちんぴらな新聞賣子で、醫者とエマアソンとの知らない色々の事が載つてゐる新聞を押賣しに來るのだ。醫者はそれが蒼蠅くて仕方がなかつた。

ある日の事、インガルスは醫者の診察室に背高な身體を現した。別に心の臓が悪くなつたので、診察を頼みに來た譯でも無かつた。米國では心の臓はオペラ袋同様女の持物になつてゐるので、背高の議員はそんな物は持つてゐなかつた。醫者は友達の顔を見ると、例のやうに新聞賣子がうるさくて、しみ〴〵エマアソンが讀めないのが何よりも殘念だと話をした。

ところへ、又しても新聞賣子の入つて來るらしい足音が聞えた。醫者は早速の氣轉で押入から標本用の人間の骸骨を引張り出し、それをちやんと椅子に腰かけさせて、自分達は何食はぬ顔で次の室に隱れてゐた。

新聞賣子は扉をあけて、勢よく診察室に入つて來た。そして毎日の事なので、其邊に氣も注けないで、づつと卓子の前までやつて來た。見ると、いつもの椅子には、肥た醫者の代りに、骸骨が一人腰をかけて、窪んだ眼で新聞賣子を見詰めながら、白い齒をむき出してけら〳〵笑つてゐた。賣子は聲を立てゝ泣き泣き外へ飛び出した。

醫者は腹を抱へて笑ひこけた。眼からは涙さへにじみ出してゐた。背高の上院議員は流石に可哀相になつて、後を追つて表へ出た。そして御機嫌取りに賣子の手から新聞を一枚買ひ取らうとした。賣子は首を掉つて、どうしても新聞を吳れようとしなかつた。

「そんなに着物を被たつて欺されるもんかい。」賣子は相手を見上げながら、そを搔き〳〵言つた。「たつた今骸骨の所を見つちやつたんだもの。」

新發明書物消毒法

すべての公開圖書館で、管理者が頭を惱ますものは、圖書の購入や、保存ばかりではない、その他に圖書の消毒といふ一大事がある。尤も數多い圖書館の管理者には、書棚に樟腦や、ナフタリンをちよつぴり包んで、それで結構消毒の目的は達せられてゐるやうに思つてゐる向もあるが、そんな事では何の役にもたちさうにはない。

書物を讀まうといふ人達には、肉體的にも精神的にも病人がよくある。さういふ人は、書物の小口に目に見えない病毒を殘して往くので、これを何う始末するかゞ、圖書管理者の問題なのである。サヴァナロオラのやうに、そんな書物

は火をつけて燒いてしまつたら、一番面倒がないのだが、さうさうきつぱりした處直も取り兼ねるから困るのだ。

東京のある大きな私立圖書館に、老人の管理者があつた。先日職をやめて書肆を開業したさうだが、圖書館に居る間は、朝から晩まで、此の書物の消毒にひどく頭を使つたものだ。

餘程氣になつたと見えて、ある時わざ〳〵懇意な醫者を訪ねて訊いてみた。

「先生、書物にへばりついてる毒つてえのは、一體どんな物なんですね。」

醫者は老人に了解めるやうに話すには、なか〳〵骨が折れた。大抵の眞理といふものは、老人のために　拵へてない場合が多かつたから。

「それは黴菌さ。手つ取り早やく言つたら眼に見えない蟲だね。」

醫者は恁う言つて、牧師のやうに胡散臭い顏をした。

「蟲ですかい、眼に見えない……」

考管理者は慌て、老眼鏡を鼻の上に押しあげた。そしてぢつと手を組んだ儘考へ込んでゐたが、暫くすると、立派な消毒法を思ひついたので、その儘醫者の家を飛び出して來た。

老管理者は途で金物屋に寄つて、金槌を一挺買つて歸つた。そして圖書庫に入ると、手垢と塵埃とに塗れた書物を、一册づゝ、取り出しては、いやといふ程叩きつけたものだ。

お蔭で書物は綴が切れたり、表紙が凹んだりして泣き出しさうな顏になつた。やつと夫に氣づいた圖書館の保護者が理由を訊くと、この勇敢な老管理者は、勝ち誇つたやうに、禿げかゝつた前額をてかてかさせた。

「はい、消毒しましたので、怖ろしい黴菌とやらを、これでこつ酷く擲りつけてやりましたよ。」

と言つて、懷中から大事の金槌を一寸取り出して見せた。

三人牧師

日增しに暑くなるにつけて誰もが山を想ひ、海を想ひ、旅を想ふやうになつて來た。

去年の夏の事、英國のリヴァプウルからボストン通ひの汽船に、ボストンで名高い牧師のフイリップ・ブルックスとダクタア・エリスとブルック・ヘルフオウドの三人が不思議に落合つた事があつた。一體牧師だの僧侶だのといふものは、立派な道を說いてる癖に、案外胸の狹いもので、傳道大會といつたやうな會合の外には、滅多に顏を合すものではない、この世でも然うだから、無論天國では一緒になれる筋のものではなかつた。

ちやうど日曜日のことなので、船のなかでも集會があつた。船長は三人のなかで誰か一人にその日のお說敎をして欲しいと賴んで來た。一體船のなかといふ

ものは、お説教をするには打つてつけの場所柄で、附近に立聽きをする神樣は居ないし、幾らお説教が拙かつたところで、聽衆は耳に手をやつて、波のなかに飛び込む譯にも往かないしするから、牧師は落つき拂つて、いつもの三倍も長説教が出來ようといふものだ。

ところが、ヘルフオウドは眞つ先きに首を掉つた。

「私は夏休み中、日曜日毎に缺かさずお説教をしたので、すつかり草臥れちやつた。どうか今日一日だけは休ませて貰ひたいもんで。」

慈う言つて、俳優のやうに眞から草臥れたらしい顏つきをして船長を見かへした。

船長はブルックス牧師の方へ向き直つた。ブルックスはエリス老人の方を指さした。

「そちらにエリスさんがいらつしやる。先輩の方を差し措いて、私どもが出る

幕ぢやありません。」

椅子にもたれた儘、うと〳〵と居眠つてゐたらしいエリス老人は、吃驚したやうに眼をあけた。

「戯談言つちやいけない。皆は貴方のお説教を聞かうと思つてるのだ。私のやうな老人が……」

きつぱり跳つけるやうに强く手をふつたが、それでも此船がこのまゝ天國の港に船がゝりするのだつたら、老人は皆を押退けて、誰よりも先に埠頭の土を踏んだに相違なかつた。

「夫ぢや、仕方がありません。」船長は悲しさうに言つた。

「あなた方が揃ひも揃つてお説教をして下さらないとなると、この汽船には神樣のお慈悲は先ないものと思はなくちやなりません。」慈う言つて船長は大きな腕を三人の鼻先でふり廻した。船が無事にボストンに着くか怎うかは、唯私の

此腕に賴る外はありませんぞ。」

船は無事にボストンに着いた。三人の牧師は乘客のなかに紛れて、船から棧橋へ、三匹蛙のやうな腰つきをしてぴよいと跨がつた。

○鼻糞

生前正岡子規と懇意だつた人の話によると、子規はその頃出てゐた「めざまし草」といふ文藝雜誌の會合で、偶に森鷗外氏の宅に來ると、定つたやうに座敷のなかに寢そべつて、頰杖をついたものだ。

「おい、紅葉君、ちよいと其處の硯を取つてくれたまへ。」

と、どうかすると、側にゐる尾崎紅葉に用事を言ひつけたりする。紅葉は氣取屋で、加之に子規よりもずつと先輩の積りで居たから、夫が癪で癪で堪らなかつたらしい。

そればかりか、子規は俳句か何かを考へる時には、よく指先で鼻の孔から鼻糞を穿くり出したものだ。そして掌面で丸藥のやうに圓めると、彈き玉か何ぞのやうに一々夫を指先きで四邊に彈き飛ばしたものだ。

汚い彈き丸はある時は禪僧のやうな露伴の懷中に飛び込み、ある時は山狗のやうな綠雨の襟首に滑り込み、またある時は氣取屋の紅葉の鼻先きを掠めて飛んだ。そんなこんなが餘程機嫌を惡くしたと見えて、紅葉はその後あまり鷗外氏の集會に出なくなつたさうだ。

鼻糞といへば、越後の良寛上人がある時、濃茶の會へ招かれて往つた事があつた。相客が所行きの上品な言葉で、風流話に無中になつてゐる間に、良寛はひとり猿きちのやうなきよとんとした顏をして、指先きで頰と鼻糞をほじくつてゐた。

さうかうするうちに、濃茶が廻つて來さうになつたので、良寛は急いで掌面

の鼻糞圓めにかゝつた。そして夫をこつそり膝の左側に置かうとすると、そこに坐つてゐた男は、じろりと尻目にかけて怖い顔をした。良寛は慌てゝ夫を拾つて、今度は膝の右側に置かうとした。するとそこに坐つてゐた男は、一寸眉をしかめて、口もとをへの字形に歪めた。上人は泣き出しさうな顔をして、またその丸藥を手に取りあげた。

だが流石に長く禪で苦勞した程あつて、上人はその一刹那鼻糞は鼻の孔から取り出して來たものだといふ事を思つた。佛のものは佛に返さねばならぬ世の中だ。鼻のものは鼻に返した方が一番無難である。上人は丸藥をその儘無理やりに鼻の孔に押し込んだ。二つの孔から取り出して來たものを、一つの孔に押し返した所で、そんな事位で艶れつ面をする鼻でもなかつた。上人は舌鼓を打ちながら濃茶を飲んだ。

敵と踊る

佛蘭西の歩兵軍曹にジャンといふ男がゐる、膽の太いしつかりとした、加之に教育のある男で、佛蘭西語と同樣獨逸語をも自由に操る事が出來た。

一體語學が達者に出來るのは得なもので、獨逸のゲーテは、他の國の語を一つ覺えるのは、やがて一つの世界を殖やすやうなものだと言つたかに覺えてゐる。世界を一つ殖やすのも面白くない事はないが、それよりも眞實なのは、語學は一種の道樂で、これを習つておけば、自分の道樂心を滿足させる色々の惡戯が出來るといふ事である。

ある眞夜なかの事、ジャンは敵の偵察を言ひつかつて、獨逸軍の塹壕から、漸と十米突ばかりの近間まで覗ひ寄つた。すると、何處かにこそこそ人の動く氣配がしたので、ジャンは蜥蜴のやうに地面に腹をすりつけた。だしぬけに低い

押し潰すやうな聲で呼びかけるのが聞えた。耳をすますと半熟の佛蘭西語である。

「おい、何だつて、そんなに靜肅してるんだい。僕は先刻から君がやつて來るのを見てたんぢやないか、すると今地面に這ひ屈んだね。君を擊つと言やしまいし、僕はバヴァリヤ生れだよ。」

「さうか、今晩は。」とジャンは立派な獨逸語で返事をした。

「おい／／。」塹壕のなか、らまた聲が掛つた。「君は獨逸語が喋舌れるんだね。一寸待つてくれ。今朋輩を起して來るから。丁度今は士官が居ないから一等都合がいいんだよ。」

ジャンは幾らか心配な氣もしたが、それでもじつと待つてゐる事にした。暫くすると、バヴァリア兵は獨逸式の軍服と軍帽とを持つて出て來た、そして夫をジャンに被せて、自分達の塹壕内に連れ込むだ。

そこでは浴びる程うまい麥酒を飲む事が出來た。ジャンは醉つた紛れに變な腰つきをして舞踊を踊つた。バヴァリア兵は小聲で歌を唱つた。いよ／／お別れになると、彼等は色々な土産物をジャンに呉れた。

「今度またおいでよ。口笛で合圖して呉れゝば、鐵砲なんか擊ちやしないよ。」

彼等は十年の友達にでも別れるやうに言つた。「僕達はバヴァリア人だよ。佛蘭西は大好きなんだが、止むを得ず戰爭してるんだからね。」

博士と小學生徒

詰込み主義の鸚鵡流の教育では、日本の學校は何國にもひけを取らないが、何事にも自由な米國でも、教育だけはまた別だと見えて、近頃怎ういふ話があつた。

ある小學校の校長は、毎朝課業の始まる前に、定つたやうに生徒を講堂に集め

た。そして小高い教壇の上に鉛筆のやうに眞つ直に衝立ちながら、咽喉一杯の聲を張りあげて訊いたものだ。

「皆さん、あなた方は恁うやつて大勢講堂に集まつてゐますが、萬一ひよつとした事で、この建物から火が出た時には何うしますね。」成る程學校の建物は、校長が火を氣遣ふやうに粗末な木普請で、そこらの柱などは傴麻質斯でも患つてゐるらしく、イヒチオウルのやうな茶色の藥で塗りくつてあつた。

夫を聞くと、生徒は讃美歌でも唱ふ折のやうに、一齊に聲を揃へて返辭をした。

「先生、私どもはみんな腰掛から起ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に外へ逃げ出します。」

校長は滿足さうにぐつと顎をしやくつた。彼は恁ういふ風にさへ敎へて置けばいつどんな事が起きても生徒は滿足に避難出來るものと信じてゐるのだ。

ある日の事、その學校へヴアン・ダイク博士が訪ねて來た。博士は聞えた著述

家だといふので、校長は生徒のために一寸したお話を賴んだ。

ヴアン・ダイク博士は、いつも校長が鉛筆のやうに衝立つてゐる教壇に立つた。そして落つきのある聲で言つた。

「皆さん、私は博士ヘンリ・ヴアン・ダイクといふ者です。私が今こゝに立つて皆さんのためにお話をすると言つたら、皆さんは何うしますか。」

博士は恁う言ひさして、慈悲の籠つた眼で、じつと生徒を見おろした。

生徒は家鴨のやうにぎやあ〳〵聲を揃へて言つた。

「先生、私どもはみんな腰掛から起ち上ります。そして一先づ廊下に出て、遽てないで順々に逃げ出します。」

ヴアン・ダイク博士は夫を聞くと、傴麻質斯に罹つたやうに痛さうに顏をしかめた。教壇の下では、校長が火事に出會したやうに、眞つ赤になつて顫へてゐた。

卵を一つ

ある時、發明家のトーマス・エヂソンの實驗室を、若い婦人客が訪ねて來た事があつた。すべて天才の事業を認めて、心より夫を崇拜するものは、男よりも女に多いものだ。こんな時に、男はどうかすると、嫉妬に驅られて、けちを附けたがるものだが、女は割合に素直な心を持つてゐる。

エヂソンは美しい女客のために、自分が今實驗に取りかゝつてゐる色々の仕事を解り易く說き聞かせた。丁度夏の午前の事で、女客は顏の汗を拭き〳〵感心したやうに幾度か首を掉つて聽き惚れてゐたが、暫くすると發明家の顏を振り向いて訊いた。

「承はつてみますと、何もかも結構だらけですわ。これまで先生には、こんなに幾つもの立派な發明をなすつて居らつしやりながら、まだ何か知ら仕遂げ

てみたいと思つてゐらつしやる事業がおありになりませうか知ら。」

「有りますともさ。」發明家は女客の顏をじつと見詰めながら言つた。「もしが貴女が誰にも洩らさないつて事を約束して下さると、私が取つて置きの希望をお話してもよい。」

「お約束致しますとも。屹度誰にも話しは致しませんわ。」

と若い女客は幾らか顏を赧らめながら身體を乗り出すやうにして言つた。女にしてみれば、この偉い發明家が何か知ら內證事を、自分にだけ打明けて呉れるといふ事が、何よりも嬉しかつたのだ。「私承はる事が出來たら、それが一日も早く成功するやうに神樣にお願掛しますわ。」

「有り難う、厚くお禮を申しておきます。」エヂソンは眞面目な口を利いた。そして他人に立聽でもされるのを氣遣ふやうに、幾らか聲を落して言つた。「私の行つてみたいつて事はね、御覽なさい、那處に煽風器が廻つてるでせう……」

と部屋の隅つこにある煽風器を指ざした。「あの煽風器に卵を一つ投げつけてみたいんです。唯それだけでさ。」

顯微鏡の寄附

富豪アンドリウ・カアネギイの知人で、獨逸へ渡つてエナ大學で名高いヘッケル教授に弟子入りをしやうといふ男があつた。幾らか補助金をも貰つてゐるので、出發前に一度この富豪を訪ねて、暇乞ひの挨拶をした。

カアネギイはヘッケル教授の名を聞くと、眼を光らせた。

「ヘッケル！。ヘッケル教授といへば名高い學者だ。それに就いて一つお頼みがあるんだが、もしか彼地で教授にお會ひだつたら、記念のために何でもよろしい、那の人の手蹟が貰つていたゞけまいか知ら。」

「よろしい、承知しました。」

その男はヘッケル教授の從弟ででもあるやうに安請合に承知した。そして教授や自分達のやうな、學者の手蹟を集めやうといふカアネギイは、まあ何とした物の解つた爺さんだらうと思つて、じつと富豪の顔を見つめた。だが、實をいふとカアネギイはその折にはもうヘッケル教授の事も自分の眼の前にゐる客の事も忘れて、鐵の値段でも胸算用してゐるらしかつた。

その男がエナ大學に着いて、暫くすると肝腎のヘッケル教授から手紙がカアネギイのところに達いた。鋼鐵王は急いで封を切つたのなかから零れ落ちたのは、かねて待ち設けたヘッケル教授の紛れのない手蹟であつた。

ツンプト式顯微鏡　一個

右エナ大學植物學研究室へ御寄贈下さつたに就きましては厚くお禮を申し陳べます。

エルネスト・ヘッケル

アンドリウ・カアネギイ殿

手蹟には恁う認めてあつた。

カアネギイは釘抜きで鼻先きを捻ぢ曲げられたやうな顔をして苦笑ひをした。でも、次ぎの瞬間には執事を呼んで、ツンプト式顕微鏡を買ふだけの金子をエナのヘツケル教授あてに送るやうに言ひつけるのを忘れなかつた。

そこらの富豪達もよく聞いて置くがい、。カアネギイのする事に、何一つ間違つた事はござらないが、安心なのは學者など餘り友達に持たない事である。

愕堂の日本料理談

佛蘭西通の稲畑勝太郎氏が、こないだ何かの用事で尾崎行雄氏を訪ねた事があつた。談話が濟むと、尾崎氏はお客を連れて、自分の宅の食堂に入つて往つた。

「別に何もないが、女房の手料理といふところを味はつてくれ給へ。」

その口振から察すると、テオドラ夫人の庖丁加減が大分自慢らしかつた。

實際テオドラ夫人の手料理は美味かつた。尾崎氏は肉汁で汚れた胡麻白の口髭を捻りながら、料理について色々な事を話した。

「一體これまでの日本料理は、見た眼にはなかなか美しいが、味はつてみると一向うまくありませんね。」と尾崎氏は聽衆が少いのを物足りないやうに、卓上に並んだ藥味臺や洋酒の壜をじつと見比べた。「あれは徳川氏が自分の政策上から、あんな料理法を拵へ上げたので、一體吾々の食べる魚肉といふものは、皮肉の間が膩が乗つて一番うまいものなんです。ところが、徳川氏は、諸大名を肉體的に衰へさせるには、そんな結構な所を食べさせてはならないといふので、今に傳はつてるやうな見た眼に美しい料理法を奬勵する事になりました・・・」

「成程面白い御觀察で・・・」稲畑氏は感心したやうに小首を傾けた。

「其の政策はまんまと當つて、諸大名は見た眼の美しい料理ばかりを好くやうになつた結果、肉體の力が衰へて、野心も何も無くなつてしまひました。」と尾

崎氏は自分でも其の觀察の奇拔なのに感心したやうにとんと輕く卓子の上を叩いた。ビフテキは吃驚したやうに皿のなかで顫へた。「ところが、妙なもので、其の德川氏自身がいつの間にかそんな料理に舌鼓を打つやうになつたものですから、段々精力が衰へてとうと自滅するやうな運命になりました。」

「しますると…」稻畑氏は肉刀をかちかち言はせながら調子を合はせた。「日本人を新しく拵へ上げるには、今迄の料理法から遠ざかつて、皮肉の間を食べるやうにしなければなりませんね。」

「然やう〳〵。」尾崎氏は氣に入つたやうに頷いた。そしてテオドラ夫人の手料理は、とりわけ其の點によく氣を注けてあるやうに、猫のやうな口もとをして勢ひよくビフテキに嚙りついた。

結構な議論で、尾崎氏としては少し出來過ぎてゐるやうだが、しかしこんな結構な議論を人前で喋舌り散らすなぞは考へ物で、もしかこれが反對黨の原敬さ

んの耳にでも入つて、三度三度皮肉の間を食べられでもしたら、尾崎氏も困る事になりはしないだらうか。とかく內證の事〳〵。

停車場の演說

グラッドストオンといへば、大臣を勤めてゐる時も、止めてゐる時も、いつも人氣のあつた政治家で、偶に旅行でもする時には、怖ろしく澤山な新聞雜誌の記者が一緒に蹤いて往つたものだが、この偉大な政治家は、その孰れをも滿足させて歸したものだ。

ある時こんな事があつた。それはグラッドストオンが、何かの用事で倫敦からエディンバラに出掛けた旅行中の事で、その折はどういふものか、新聞記者といつたら、某社の記者がたつた一人隨行してゐるに過ぎなかつた。

汽車が途中のある驛につくと、停車場にはこの偉大な政治家を一目見やうとい

ふ、物好きな土地の人が一杯に待つてゐた。無精な日本の政治家、例へば原敬氏のやうな人だつたら、動物園にゐる西伯利產の狐のやうに、窓から白つぽい頭を覗けて、狡さうに一寸會釋をする位に過ぎなからうが、この英國の首相は態々入り口に出て來て、出迎人を相手に演說を始めた。

土地の人は、思ひがけなくこの政治家の演說が聞かれるといふので、ぎつしり汽車の前に押しつめて來た。田舍の人達の事とて、胃の腑の詰まつてゐる代りに、頭のなかは空鑵のやうに空つぽだつたから、演說は一言一句その儘に入つて往つたが、几帳面な汽車の時間表は、首相の演說にも少しも容捨はしなかつた。汽車は呆つ氣にとられた出迎人をプラットフォウムに殘して、さつさと出て往つた。

それでもグラッドストオンは演說を止めなかつた。今度は側に立つてゐる某社の記者の方へ向き直つた。持前の雄辯を揮ひ出した。幸ひ記者は速記を心得てゐたから、少しも狼狽へなかつた。あたふた手帖を取り出して、瀧のやうな首相の雄辯をそのまゝ。そつくり書きとめる事が出來た。

記者の速記はその儘翌日の新聞紙に現れた。停車場で政治家の演說を聞きさした地方人の驚きは大したものであつた。——グラッドストオンは恁ういふ風に、通信機關を巧に利用する事を知つてゐる人だつたから、氏が公的生活から、隱退すると、ある通信社などは、的面に二萬圓ばかし收入が減つたといふ事だ。

花嫁を忘れる

學者や發明家などいふ輩は、一事に熱中して心を奪はれる結果、どうかすると、うつかりして身邊の事を忘れるのが多い。忘れないからといつて、學者として立つのに少しの差閊もないが、忘れた方が愛嬌になる場合が多い。

發明家トオマス●エディソン（といふとエディソンは顏をしかめて、自分は發明

家などいふそんな偉い者ぢやない、言はゞ工夫家さと言譯をするかも知れない）も實は其の一人だつた。エディソンは結婚すると、直に花嫁を連れて新婚旅行に立つたが二週間ばかし靜かな田舍を歩き廻つて、漸つと都へ歸つて來た事があつた。

汽車が停車場に着くと、此發明家は急いで廊下に飛出した。そして何事か考へ込んでゐるやうに、兩手を胸の上に拱んだ儘、少し俯向き加減に市街へ差しかゝらうとした。すると思ひがけなく

「おい君、エディソン君。」と呼びかけた者がある。發明家はひよいと顏をあげてみた。前には友達の一人が立つてゐた。

友達は笑ひ〳〵言つた。

「君。何か忘れ物をしてやしないかい。」

「忘れ物？」

エディソンは立ち停つて考へ込んだ。そして先づ手をあけてそつと頭へ觸つてみた。仕合せと帽子はちやんと頭の上に載つかつてゐた。今度は兩手を洋袴の隱しに突込むでみた。隱しには何一つ無かつたので、はつとなつたが、よく考へてみると初めから何一つ入れてはなかつたのだ。

「何にも忘れ物なざ無いやうだが。」

「有るだらう。友達は幾らか戯談のやうに言つた。何か有る筈だが。」

「無いよ。何にも無いよ。」エディソンは意地になつてきつぱりと言ひ切つた。

「それぢや那處を見給へ、大事の忘れ物が笑つてゐらつしやる。」

友達はエディソンの肩越しに停車場の方を指ざした。發明家はのつそり後方をふり向いてみた。そこには此方向きに廊下に立つてゐる花嫁御の姿が見えた。

花嫁はにこ〳〵顏で言つた。

「あなたはほんとうに思ひやりのあるお方ね。」

「失敬々々。」エディソンは慌てゝ、後がへりをした。

「つい考へ事に氣を取られちやつてね、こんな事は初めてだよ、これから屹度氣をつける。」

「そのお言葉も三日位は利くでせうよ、さあ、御一緒に參りませう。」

花嫁は自分の存在を證明するやうに、わざと邪慳に良人の腕をとつた。發明家の花聟はひきずられるやうに蹤いて往つた。

だが、實をいふと、女房は三日に一度は忘れた方がいゝやうだ。すると、エディソンの知らない色々の事が發明出來やうといふものだ。

子役の粗忽

今道頓堀の中座で演つてゐる「故郷飾錦伊達織」伊達家奥御殿の場に鶴千代丸に扮してゐる實川延寳と、千松に扮してゐる中村芝藝雀といふ子役が二人ゐる。

いつも奥御殿の場になると、子供心にも競爭心を起して、一生懸命に藝を勵むので、見物衆も思はずほろりとさせられてゐるが、八日の演出には、子役のこには殆ど持ち切ない程の思ひもかけぬ大事件が起きた。

それは外でもない、延若の政岡が風爐先きの屏風にひしと身を寄せて忍び泣きをしてゐると、「稚けれども天然に太守の心備はつた」箸の延寳の鶴千代が、手の頃の寒さに、つい堪へかねて小便が仕たくなつた事だ。

鶴千代は政岡の方に氣をかねながら、押し潰したやうな泣聲を立てた。

「おつ母あ、小便がしたい。」その日は河内家の總見があつたので、肝腎の阿つ母は皆と一緒に場に坐つて、惚々と吾兒の藝に見とれて、夢中になつてゐた。

「おつ母あ、小便が仕たい。」

鶴千代は二度まで恁う言つたが、つい堪へきれないで、ちやんと脇息に凭れたまゝ、袴のなかに小便を漏した。袴は言ふまでもない事、美しい衣裳小切まで。

しつぽり濡通つてしまつたが、鶴千代はその儘平氣な顏で押通してゐた。

幕が締ると、夫に氣づいた母親は、延寶を連れて河内家の部屋へ謝りに往つた。

「親方どうも相濟みません。幕合に私が氣をつけるのを忘れたんですから。」

かう言つて母親が闕際に額を押しつけると、延寶も小便に濡れた太守の着附のまゝで、叮嚀に栗のやうな小さな頭を下げた。

すると、先刻から子供心に朋輩の上を氣遣つて、こつそり後について來た千松役の芝藝雀は、いきなり前へ飛び出して、鼠のやうに疊の上に小さくなつた。

「親方、かんにんしとくなはれや、小便仕たのは延寶さんやおまへん、私だすよつてな。」

芝藝雀は主從で勤めた舞臺の心持を忘れないで、部屋にかへつても、まだ主人の身代りにならうとしてゐるのだ。

夫れを聞くと、延若は兩手を拍つて感心した。

「よう言つた。芝藝雀、その心持々々。その心持を忘れるんぢやないぞ。」

お蔭で芝藝雀は面目を施して歸つたが、延若は今一人褒めなければならぬ子役のある事を忘れてはならない。夫は粗忽をした延寶で、小便がしたくなつても、じつと坐を立たないで、その儘袴のなかに漏して、そ知らぬ顏をしてゐたところに、確に五十四郡の太守たる貫目がある。せい〳〵粗忽をする事〳〵。

人相見

少い時には誰しも自分の身の方向に迷ふものだが、アメリカのある少年が、自分にはどんな職業が向いてるか知らと、色々思案の末が、よくある慣ひで人相見のとこに出かけて往つた事があつた。

人相見はしかつべらしい顏をして、少年に色々の事を訊いた。いづれも人相を見るのに聽いておかなければならぬ事かも知れなかつたが、中には何うでもよ

からうと思はれるやうな事まであつた。それは

「お前さんには姉さんがゐるかね。齢は幾つなの。」

と訊いた事で、姉があらうとあるまいと、その姉が幾つにならうと、自分の人相に關係もない事だと思つたので、少年は夫には返辭をしなかつた。

質問がすむと、人相見は少年の額を押へてみた。次ぎにはまた頭髙を押へたりした。そして卓子に兩臂をついて、じつと頭を抱へて、暫らく考へ込んでゐたが、やつとの事で次のやうな檢察書をかいてくれた。

「貴殿は世間並の人とならるべし。卓拔のところは少しも見えず。才氣なければ、人の長たる事思ひもよらず。吾が力を恃むほどの自信もなし。かるが故に人の上に立たんなど、身に過ぎたる事に志すべからず。萬づ吾が程を知りて、分に安んじなば身も安全なるべし。」

少年はそれを讀むで、一時がつかりしたらしかつたが、夫でもせつせと精を出

すに越した事はない筈だと、一生懸命に仕事を勵むだ。すると、不思議な事に、ぐんぐん出世して、吾と吾が力を恃む事が出來るやうになり、安心して人の長になる事も出來るやうになつた。この少年は誰あらう。今米國の造船總監として非凡の手腕を揮つてゐるチャアルズ・シユワツブ氏其人である。

この書の著者がある時大和の久米寺に詣つたことがあつた。本堂の鄙格子につかまつて内陣を覗き込むでゐると、後ろから

「どうだす、一つ手相を見せて頂けまへんやろか。」

といふ聲がした。振りかへると、お札賣の爺さんであつた。

私は掌面を爺さんの鼻先につきつけた。爺さんは狗のやうにうそうそ嗅ぎまはつてゐたが、

「あんさん、よろしおまんな手相が、株を買ひなはつたら屹度上りま。緣談やつたら急ぎなはらん方がよろしおますが、事によつたら國會議員になんなはる

かも知れまへんぜ。」

丁度その頃議員の選擧期だつたので、爺さんは思ひ出したやうにこんな事までつけ足した。

おかげで、記者は二十錢銀貨を奮發させられた。國會議員になるには廿錢位が相當だと思つてゐたのだ。——ところが、いつまで待つてもなりさうにはない。

桃の實

海軍＊＊學校の校長F中將が、大橋乙羽がまだ存命當時、道連れになつて、一緒に米國を横切つた事があつた。

ちやうど桃の實の熟れる頃で、果物好きな乙羽は、汽車の窓から桃の實をしこたま購ひ込むで、次ぎから次ぎへと止め度もなく貪り食つた。そして口に殘つた核子は一頻りしやぶり通した後で、猿のやうな口もとをして、床の上に吐き出して素知らぬ顔をしてゐた。

それを見た乘合の亞米利加人は、みんな不愉快な顔をした。なかにも婦人客は神樣が接吻と嘘とのために特別きやしやに拵へたらしい唇を、邪慳に壓し曲げて、輕蔑みきつた眼つきをして、この黄いろい肌の日本人を見た。幾度か西洋に渡つて、あちらの風習を知りぬいてゐるF中將は、はらはらして乙羽に耳打をした。

「大橋君、君が桃の核子をみんな床の上に吐き出すので、毛唐め、あんなに機嫌を悪くしてゐるよ。」

「何だつて機嫌を悪くするんです。」

乙羽は桃を口一杯に頰張りながら言つた。

「それがね、恁うなんだ。」

中將は嘘を吐く者に附き物の、わざと氣取つた口ぶりをして言つた。それによ

ると、すべて西洋人は汽車のなかで果物を食べる折には、食べ殘した核子は、一々克明に窓から外へ投げる事にきめてゐる。投げられた核子は、芽を吹き花を開いて、幾年か後には、鐵道の兩側は美しい花園となり、おまけに果物圃となるので、どれ程土地の人のためになるか知れないといふのだ。

「成程な。」

乙羽は胃の腑の底から感心しきつたやうな聲を出したが、暫くすると、恥しさうにそつと手を伸ばして、床に吐き散した桃の核子を、一々拾ひ取つては窓の外に投げ出した。

旅行から歸つて、暫くすると、F中將は乙羽から「米山歐水」といふその折の觀光記を受取つたが、別に開けても見ないで、その儘本棚の隅つこに投り込んでおいた。すると間もなく乙羽も亡くなつてしまつた。船橋氏は記念の「米山歐水」を取り出して、一寸表紙の埃を彈いて讀みかけてはみたが、別に軍人を天

使のやうに書いてもなかつたので、其儘打捨らかして了つた。すると、この頃になつて、中將は自分の子供が、西洋人は汽車で果物を食べると、核子は背窓から捨てる事になつてゐる。あちらに花園や果物圃の多いのは、その故だといふ事を話してゐるのを聞いた。

「誰にそんな事を聞いたね。」

中將は吃驚しながら訊いた。

「誰にだつて。ちやんと教科書に載つかつてますよ。」

子供は得意さうに答へた。

中將は慌て、その教科書を取寄せて見た。それには乙羽の「米山歐水」から抜書された文章が立派に載つてゐた。

「嘘だ〳〵。みんな俺の嘘だからね。」

F中將は早速文部省に掛りの人を訪ねて、恁う言ひながら強てその文章の取消

を頼んだ。

ほんまに窮屈な世間だ、嘘もろくに吐けないんだからね。」中將は文部省の女關を出る時、獨語のやうに呟いた。――實際窮屈な世間だ、眞實の事の言へない世の中に、嘘が吐かれやう筈がないのだから。

十二種の新聞を讀む小僧

今はむかし、米國のアイオワ州、バノラの町のさる銀行支店に給仕を勤めてゐた十五歳ばかしの少年があつた。恐ろしくこまめな性質で、朝はやく起きると、ぢきに床を掃除する。掃除がすむと、今度はせつせと雜巾がけをする。それから暖爐を焚きつけ、窓硝子を拭き、眞鍮製の欄干を拭き込む。拭いて拭いて重役の頭のやうにぴか〳〵光り出すまでは少しも手を休めない。

室のなかの掃除がすむと、給仕はいきなり表へ飛び出して、街道を掃除する。

雨あがりの道に水溜が出來てゐると、附近の土をならげて夫を埋合はせ、町の人の通り易いやうにする。――恁うしてせつせと働いて、一週に三弗の給金を貰ふ外には、別に誰からお禮を言はれるのでもないが、給仕は少しも不足の顏を見せなかつた。

その一週三弗の給金で、給仕はいつも素晴らしい買物をする事に定めてゐた。素晴しい買物といふと、算盤高い今の人は眞ぐ船株か、鶉の卵かを聯想しるらしいが、給仕の買つたのはそんなけちな物ではなかつた。亞米利加のいろんな市から出る週間新聞の主だつたもの十二種ばかりだつた。

「何だつて、そんなに週刊新聞ばかり買込むのだね。」

ある時、同じ銀行の貯金掛りが恁う言つて調弄ふと、給仕は悧巧さうな、くるくるした顏をあげた。

「廣い世界のいろんな事が知りたいからなんです。バノラの町は私にとつて餘

り狭すぎるんです」

夕方銀行の仕事が濟むと、給仕は自分の室に入つて、その十二種の週刊新聞に氣も心も吸ひ取られたやうにじつと讀み耽つたものだ。そして狭いパノラの町で、どんなことが起きやうが、それは少しも頓着しなかつた。

給仕は成長くなるに連れて、ぐん〳〵出世をした。タフト氏が大統領をしてゐた頃、この給仕を大藏省の秘書に抜擢しやうとしたが、給仕は首をふつて承知しなかつた。その人こそシカゴの有名な銀行家ジオヂ・レイノルヅ氏で、今ではニューヨークの紐育の銀行を除いては、米國第一の大資本を有つてゐるシカゴ某銀行の頭取である。

仲麿と背中合せ

東京は赤阪一つ木のT氏の邸を、表口から入つて右に、高さ五尺ばかりの古い

石碑がある。碑の文字は雨風に打たれて幾らか傷んではゐるが、誰の眼にも

安部仲麿塚

といふ五文字だとは直にわかる。

仲麿は誰もが知つてゐる通り、唐土の空でビスケットのやうな乾いたお月様を見ながら、

「三笠の山に出でし月かも」

と歌つた男である。ところで、この石碑はもと仲麿の出生地だと言ひ傳へてゐる大和の安部村にあつたのを、去年の秋何うした譯か、奈良の古物商が買ひ取り、幾らか持て餘し氣味だつたのを、それを聞込んだT氏がわざわざ讓り受けたものである。T氏は女以外の物だつたら、どんな我樂多でも古くさへあれば納得出來る性の人である。

京都の嵯峨に俳人去來の墓がある。尖つた三角型の洒落た石で、舞妓の振袖にも包まれさうな小さな石碑である。ある時京都の出水邊に住んでゐる物好きな男が、この石碑を女房に見せたいからといつて、風呂敷を懷中にしてわざわざ嵯峨まで出掛けたものだ。女房の機嫌を取るためには、どんな事をも仕兼ねない男で、猫の兒を嫁入らすやうに、去來をその儘風呂敷包みにして提げて歸る積りだつたのだ。ところが、途中で大粒な丹波栗をしこたま購ひ込んだので、つい其儘になつてしまつた。女といふものは、どんな人の墓よりも栗のきんとんの方を嬉しがるものだといふ事をその男はよく知つてゐたのだ。

T氏は物持だから、安部仲麿を買取るについて、栗のきんとんを儉約したか、何うかは知らないが、兎も角もその石碑は今では氏の玄關先きに衝立つてゐる。

「何に使つたものか知ら、仲間の奴を一つあつと言はせるやうな使ひ道がありさうなものぢやて。」

T氏はその前を通る度にいつもさう思つてゐたが、ある時芭蕉翁の句集で、「木曾どのと背中合せの寒さかな」といふ句を見て覺えず膝を叩いた。

「さうだ、乃公の墓にしやう仲麿のと背中合せに、乃公の名を彫りつけて、さて側面には

仲麿と背中合せの月見かな

と恁うやるのぢや。へつ、どんなもんだい。この趣向には大抵の奴が恐れ入るぢやらうて。」

T氏は恁う考へついてからは、一日も早く自分の墓が拵へてみたくなつた。そしてまた一日も早く死んで、その墓の下から友達の恐れ入る顏を覗いてみたくて溜らなくなつたらしい。結構な道樂さ。だが、芭蕉はまた言つてゐる。——

「秋深し隣りは何をする人ぞ」と。——もしか仲麿が隣りは何をする人だと訊いたら、T氏は何と答へるだらう。

「乃公は實業家だよ。」

と言つた所で、悲しい事には仲間は實業家といふ結構なものを知らないかも知れない。

幸運兒

今はむかし、千七百九十一年の一月五日の午すぎ、佛蘭西はセエヌ河の畔、オクソンヌといふところで、五人の衞戍將校が、猿のやうにきやつ〳〵と輝躁ぎながら、變な腰つきで氷すべりをしてゐた事があつた。

ところが、そのなかの若い將校の一人は急に勢のない顏をして立ち停つた。

「あゝ、腹が減つた〳〵、僕は腹が減つて溜らないから、もう歸るよ。」

恁う言ひ捨てゝ、その男は急いで歸り仕度に取りかゝつた。皆は慌てゝ、引とめた。

「そんなに急ぐなよ、今暫くしたら、僕達も一緒に歸るんだから。」

だが、若い將校は皆の言ふ事を肯かないで、滑り靴を脱ぎ捨てゝ、さつさと歸つてしまつた。腹の減つた身には、物を言ふのも太儀らしかつた。

「は、は。奴さん、またいつもの剛情を出しをつたな。」皆は若い將校の歸つた後で、蔭口をきゝながら、勢ひよく氷の上を滑つた。巧く滑れる時は、自分の身體を五サンチイムの銅貨のやうにさへ思つた。

皆が有頂天になつて騒ぎ立つてゐる一刹那、どうした機みか、氷はばり〳〵と音を立てゝ、割れた。そして四人が四人とも、その割れ目に陷ち込んで死んでしまつた。一足先に歸つた一人こそ、實際都合よく腹が減つたもので、然もなかつたら氷の裂け目に皆と一緒に銅貨のやうに滑り込んだに相違なかつた。その腹の減つた一人こそ誰あらう。後には佛蘭西皇帝にまでなつたナポレオン・ボナパルトであつた。

船酔

バアシング將軍が、歐洲派遣の米國軍を引連れて、大西洋を横斷つてゐた時の事、海は將軍の門出を祝福するやうに大きな肩を搖ぶつて笑ひ出した。その笑ひやうが餘り無遠慮だつたので、浪は般を玩具のやうに弄んだ。

船の中できやつきやつと輕躁いでゐた若い將校連も、いつの間にか横に倒れて、うんうん唸き出した。なかに一人、船に、賭博に、加之に軍にも、女にも弱いやうな顔をした士官が、海の荒れ始めから、自分の船室へ潛り込んで、一向影を見せないのがあつた。

バアシング將軍は態々立つて、その士官の船室に訪ねて往つた。士官は船酔の果てが、枕につかまつて頻と穢い物を吐いてゐた。

「醉つたな。何か食べたがよからう。」

將軍は平氣な顔をして言つた。

「どう致しまして。」士官は瓜のやうな顔を涙と汗とでぐしよ濡れにして泣くやうに言つた。「食べた物は、みんなもどしてしまふんです。」「嘔吐したら、また食べる迄の事さ。食べては吐き、食べては吐きしてる間に、船も佛蘭西の港へ着かうといふものだ。」

將軍は命令のやうに言ひ捨てゝ、足音を曳きずりながら外へ出た。若い士官は蛙のやうに靈魂まで吐き出しさうに、また一頻り身悶えした。

植民館の設立者として名高い、米國のジエーン・アダムス女史が、ある時大西洋通ひの汽船に乘つた事があつた。その日も海は荒れてゐた。女史は船には強い方ではなかつたが、それでも二等室にゐた愛蘭人の一人が、ひどく弱り込んでゐるのを見ると、もうじつとして居られなくなつた。すべて社會改良家といふものは、猫の餌を見ては、直ぐその生活費を考へ、燕の巣を見ては、屋賃

を訊かないでは居られない、世話好きの人達である。女史は苦しさうに嘔吐し、てゐる其の愛蘭人の肩を抱へながら言つた。

「隨分お苦しさうですね、貴女のお腹は餘りお強い方ではないんですね。」

「私のお腹が弱いと仰有んですか……」愛蘭人は涙の眼で女史の顏を睨まへた。

「お腹が弱くて、こんなに嘔吐かれるもんぢやない。御覽なさい、あんな遠くまで食物を吐き飛ばしてるぢやありませんか。」

美人の木乃伊

工學博士T氏は、古代建築專攻の學者で、近頃は支那に派遣せられて、大同府の千佛山や、洛陽の龍門や、または支那五嶽の隨一と言はれる嵩山あたりまで出掛けて往つて、古物といふ古物は何一つ殘さず搜し廻つて、

「どうしても北魏隋唐となると、藝の冴え方が違つてるから偉い。大したもんですな。」

と鼻を鳴らして喜んでゐる。

このT氏が、ある時支那の西域で發掘せられた木乃伊の鑑定を頼まれた事があつた。棺のなかには白絹で叮嚀に卷かれた屍體が横はつてゐた。T氏は水蜜桃の皮を剝くやうな氣持で少しづゝ白絹をめくつて往くと、なかゝら顏を出したのは、妙齡の娘で、目鼻立ち何處に一つ點の打ちやうもない大理石像のやうな美人であつた。T氏は學者となつて、こんな美しい娘の木乃伊を鑑定するよりもいつそ放蕩息子となつて、生きたこの娘の唇に觸れたく思つたらしかつた。

T氏は吸ひつけられたやうな眼をあけて、側の墓銘を見た。夫によると、この女はさる大官の一人娘だつたが、流行病にかゝつたので、その頃の習慣通り、まだ息を引取らぬうち、生埋にしたものだといふ事が判つた。

「可哀さうに生埋にしたのださうな。」

T氏は深い溜息を吐いて、恥しさうにそつと眼がしらの涙を拭つた。學者といふものは石地藏と同じやうに、どんな場合にも涙を流してはならないからである。T氏は日本には息のあるうちに生埋めにしてもい、政治家や、軍人や、學者のたんとある事を思つて、そんな習慣のないのを幾らか物足りないやうにも思つた。

T氏はいつ迄も〳〵じつと木乃伊を見てゐるうちに、どうも兩腕の位置が少しく面白くないのに氣がついた。

「折角の美しい木乃伊だ。今少し藝術的の恰好をさせなくつちや。」

と口のなかで獨語を言ひ乍ら、そつと兩腕に觸つてみた。兩腕は釘付にせられたやうに重かつた。女の腕は生きてゐるうちと同じやうに、亡くなつてからも學者なぞの爲めには、一寸も動かうとはしなかつた。

「どうしても動かないかなあ、もう一寸の事で藝術的になるんだがね。」

T氏は女の美しい胸を見つめながら、口惜しさうに呟いた。——そのT氏に教へる、木乃伊の腕は、學者の研究と同じで、今一息といふところで、物になるのだが、得てさうならないところが世間なのである。

氣取屋の婦人

米國は華盛頓市のWTといふ名高い料理屋に、ある日の事、孔雀のやうに盛粧し込むだ婦人が入つて來た。入口の扉の側に立つてゐたのは、折目の正しい、仕立おろしの流行服を着込むだ紳士だつた。婦人は尻目にじろりと紳士の顏を見ながら云つた。

「どこか窓に近い小卓はありませんか。」

紳士はそれを聞くと、默つて婦人を連れて窓際の小卓に案内した。卓の上には眞紅な花が酒のやうな甘つたるい香氣を漂はしてゐた。紳士は眞新しい白い手

帛で椅子の埃を拂き、そこらに散らばつてゐる麵麭屑を拂ひ落したりした。手帛はその朝紳士の細君が、恩に被せながら箪笥の底から態々取り出して呉れたものだつた。

丁寧な紳士が、小卓の側を離れやうとすると、婦人は獻立表を手に持つたまゝ、女王のやうな氣取つた聲で慌てゝ、呼びとめた。

「ちよいとお待ち、この店は何が自慢なの。」

「さあ。」紳士は一寸額へ手をやつた。「何よりも甜瓜が自慢なんですがね。」

孔雀の女は默つて頷いてみせた。餘り頤をしやくり過ぎたら、損の往くやうな頷き方である。

「ビフテキも一寸食べられます。」紳士は自分が何よりもビフテキが好きなのを忘れなかつた。

「成程ね。」婦人はにこりともしなかつた。

その瞬間紳士はいつものを思ひ出した。女といふ女が戀人よりも新聞小說よりも好きな馬鈴薯である。

「それから馬鈴薯料理もなかなか美味く食べさせますよ。」

「さう、結構だわね。」

餘り取濟ました口の利き方なので、紳士はとうと腹を立てゝしまつた。

「奥さん、それから此店には今一つ自慢の物がありますよ、それは紳士と給仕との見さかひのつかないお客が偶に來るといふ事です。」紳士は捨臺辭を恁う言ひ置いて、鄭重にお辭儀をして出て往つた。紳士とは誰あらう、イリノイス州の上院議員ジエームス・ハミルトン・レキス氏であつた。

老人の忠告

去年の三月頃の事、神戸女學院出のある婦人が、廣岡淺子女史を訪問した事が

あつた。西洋人の外は大抵の人に會はない事に定めてゐる淺子女史は、お客が女學院出だといふので、ふと會つてみる氣になつた。英語が話せるのだつたら、大抵立派な人柄だといふのが女史の信條である。この點において、聖母マリアが淺子女史の伯母さんでなかつたのは、耶蘇教徒にとつて、勿怪の幸福であつた。さもないと女史は英語の話せないものは、天國から追出す事を考へたかも知れなかつたから。

客が座敷に通ると、女史は蘇格蘭の鴉のやうな眞つ黑な洋服を被て出て來た。そしてだしぬけに變な調子の英語で話し出した。お客は可笑しさが一杯なのを奥歯でじつと嚙み堪へながら、ともかくも英語で返事をした。すると、女史の機嫌が急によくなつて來た。

「あんたは西洋人のお友達をお持ちかい。」

「いゝえ、持ちません。」

「それは可けない、友達は西洋人に限る、私などはこんなに西洋人のお友達を持つてるよ。」

と言つて、女史は態々起つて往つて、手文庫のなかゝら横文字の手紙をどつさり持ち出して來た。

客が西洋人にお友達を持つてないといふ事は、幾らか淺子女史の機嫌を惡くした。女史は急に日本語で喋舌り出した。人間といふものは、すべて込み合つた事柄は、自分の國の語で話した方が都合が好いものだ。

「近頃の女學校は皆よくない、女學院にしてからが然うだ。校長にお會ひだつたらよく忠告しておいておくれ。」

「まあ、そんな御親切がお有んなさるんだつたら……」客は幾らか冷かし氣味に言つた。「あなた直に言つて上げて下さいよ、幸ひ明後日は金曜日で祈禱會なんでございますから。」

「さあ、直に私が言つてもいゝが――。」淺子女史は鴉のやうにぶる〳〵肩を顫はせながら、柱暦を見た。暦には三月――日と出てゐた。

「まだ三月で、外へ出るのは寒くていけない、追つて六月にでもなつたら、一つ思ひきり忠告する事にしよう。」

廣岡女史に告げる。今は丁度七月だ。鴉も裸で行水する頃だ。老人が若い者に忠告するなら今のうちの事だ。

煙草屋の小僧

先年米國のピッツバーグ市のある煙草屋へ一人の紳士が入つて來て、

「おい、煙草を吳れ。」

と言つた。店先に居た小僧は默つて煙草の一罐を持ち出して來たが、それを手渡ししやうともしないで、しげしげ紳士の顏を見詰めながら、何か言ひ出した

さうにしてゐた。

紳士は氣味が惡くなつて、手袋の穿つた掌面でそつと顏を撫でまはした。小僧はとうと切り出した。

「檀那さま、失禮ですが私をお傭ひ下さらないでせうか。」

紳士は不思議さうに小僧の顏を見た。

「一體何になりたいと言ふんだな。」

小僧は卷煙草のやうに身體を眞つ直にした。

「私機械の方をやつてみたいんです。」

「機械係は熱くて苦しいもんだよ。」

「どんなに熱くたつて、苦しくたつて構ひません。」

小僧は卷煙草のやうに頭に火がついても、びくともしないやうな確りした調子で言つた。

紳士は小僧の手から煙草の罐を受取つた。

「ところで、日當は一日一弗しか出ないが承知かな。」

「日當なんか幾らでもよござんす。」

小僧が熱心な顔色に紳士もつい動かされて、兎に角世話をしてみようといふ事になつた。で、先づ自分の監理してゐるカーネギイ製鐵所に投り込むで置いた。

これは今から四十年程前の出來事だが、小僧はそれから汗と油に眞黑になつてせつせと働いた結果、とんとん拍子に出世して、今では年收三百五十萬弗といふ米國でも指折の大物持になつた。その人こそ誰あらう、ベスレム製鋼會社の社長から螽蟖のやうに一飛びして、米國管船局總裁の位置に上つたチャールズ・シュワッブ氏である。

今の歐洲戰局を支配するものは、米國の暗援隊であり、その增援隊を活躍させ

るのは、米國造船能力の消長にあるのを思ふと獨逸膺懲の鍵は、とりも直さず、四十年前の煙草屋の小僧の垢染んだ掌面に握られてゐる次第なのだ。——忘れてゐたが、シュワッブ氏は獨逸系の米人である。

豚に脫帽す

獨逸の軍隊が、破竹の勢で東部佛蘭西に攻め込んだ時、そこらに住まつてゐた佛蘭西の住民は、豫てから獨逸人が吝つたれで、慾深で、有る程のものは搔つ拂はずには居られない癖を知つてゐるので、てんでに財產を愚まふのに智慧を絞つたものだ。

其なかに貧乏な農夫が一人あつた。財產といつては夫婦が身に附けるもの、外に、豚が一匹ゐたに過ぎなかつた。

「何うしたものだらう、獨逸の奴め、豚がゐると知つたら屹度盜み出さうとす

るに極つてる。」

農夫は豚の前に立つて、手を拱むで考へ込んだ、お慈悲の深い神様は、貧乏な其の男のために取つて置きの良い智慧を惠んで下すつたので、農夫ははたと手を拍つて喜んだ。

農夫はいきなり豚を叩き殺した。豚は銀行員のやうに默りこくつて其の儘死んでしまつた。農夫は剛れた手つきで、さつと其豚を切開いた。腹の中には日本の實業家などの持つてゐさうな、色々な變な物があつたが、農夫は綺麗に水で夫を洗ひ落してしまつた。豚はトルストイ信者のやうに清淨な身體になつて横はつた。

農夫はその豚の死骸に、頭からすぽりと自分の女房さんの服を被らせて、叮嚀に寢床に寢かせた。そしてその周圍に蠟燭を點して、精々悲しさうな顔をしてゐた。

暫くすると、激しい靴音がして、獨逸兵が扉を跳ね飛ばすやうな勢で入つて來た。農夫は兩手の掌面に塡めてゐた顔を怠儀さうにあげた。獨逸兵は吠えつくやうな獨逸語で何か訊いたが、農夫は默つて頭を掉つた。

見ると、寢床の上には女の着物を被た死骸らしいものが轉がつて、枕もとには蠟燭さへ點つてゐる。

「死人だ、事によつたら女房さんかも知れない。」

と思つた兵卒は、胸で十字を切つて、一寸帽子を脱いだ。そして氣の毒さうな顔をして默つて出て往つた。

農夫はほつと息をついた。着物を跳ねのけてみると、豚は心の臓も腸も持つてない癖に、鐵面皮にも平氣で脚を踏み伸して横になつてゐた。

女形の心得

むかし翫雀歌右衛門が、女形をする心得を言ひ殘した事があつた。それによると女形はすべて膝がついて居なければならない、何よりも大事なのは、この膝で、そして手元を柔かにしてゐれば、其儘女になりきる事が出來るのださうだ。濱村屋菊之丞といふ女形が、木挽町で菅原を演つたとき、覺壽と梅王と千代との三役を勤めた事があつた、梅王には車曳のくだりで、兩臂を張り手先を肩に預けないやうに腕を組むで、

「喰ひふとつた時平どんの尻こぶら、二つ三つ・・・」

と左手の拳で右の二の腕を打つところがある。それを菊之丞が何ういふかは幕内の面白い問題となつてゐた。

といふのは、その頃は女形のつつましい口からは、尻といふやうな端たない言

葉は夢にも言つてはならない事になつてゐた。ところが、菊之丞は稽古の時、そこへ來ると、急に聲を落して何か譯の分らぬ事をくど〳〵と言つて誤魔化してゐた。

「何を言つてるのだらう、芝居が開いてもあんなぢや困つてしまふが。」

皆は寄々その事を話して氣遣つたものだ。すると初日の幕が開いた。待ち設けた車曳となつた。皆は身體ぢうを耳のやうにして、その臺辭を待つた。菊之丞は叫んだ。

「時平どんの御面相二つ三つ・・・」

皆はやつと安心して、ほつと息をついた。

大阪俳優のうちで、女形としては第一流といはれる中村福助が、去年淀川に堤切れがあつた當時、清荒神から大勢の贔屓客と一緒に、大阪歸りの電車に乘込んだ事があつた。電車が十三と三國との間に來ると、出水はもう軌道を浸し

てゐて、車は鳥のやうに聲を立てながらおつかなびつくりに進むより外に仕方がなかつた。福助は物珍しさうに窓に顔を押しつけて、夜目に氣味悪く光る水の面を眺めてゐたが、ひよいと連の男を振かへつたと思ふと、

「どうだす、これが砂糖水やつたらよろしおまんのになあ。」

と、舌嘗づりをしながら言つてゐた。

帝劇の尾上梅幸が、芝居がはねてから、夜遅く友達と一緒に外濠を歩いてゐた。空には星が瞬きをしてゐた。梅幸は立ちどまつてじつと夫に見とれてゐたが、しみじみと思ひ込んだらしく、

「あれが、皆ダイヤだつたらなあ。」

と獨り言のやうに言つたといふ事だ。

梅幸も福助もさすがに女になりきつてゐる。値安で成るべく好い物を手に入れたいと思つてゐる點において。

賣子娘

名高い紐育の百貨店ワナメエカアの手套部に、近く入つて來た賣子娘があつた。ある日の事、婦人のお得意に手套を一つ賣つた後で、今度は直ぐ側に立つてゐる紳士のお客の方に振向いた。

「入らつしやいまし。何かお入用のお品でも・・・・」

「羊皮の手套を一つ。」

賣子が取り出した手套を受取りながら、紳士は言つた。

「こんな事を言つて、氣に障へて貰つては困りますが、先刻の婦人に對するあなたの應對振は、まだ十分とは言へなかつたやうですね、あの方は此方の出やうによつては、もつとお需めになつたかも知れませんよ。」

賣子娘は酸つぱい物を嘗めさせられたやうな顔をしたが、それでも負けては居

なかつた。

「あなたはお客扱ひがお上手でいらつしやるやうですね。何ならこゝで暫くお手本を見せて戴けないでせうか。」

「よろしい、承知しました。」

客は斯う言つて、吃驚する娘には頓着なく、すつと帳場に入つて來た。そして身輕に外套と帽子とを脱ぎざま、今入つて來たばかりの婦人客の方へ愛嬌のある顔をふり向けた。

「毎度御贔屓に預かりまして……今日は何か……」

「あたし洗濯の利く白手套が欲しいんですが……」

紳士は賣子娘に白手套のしまつてある棚を訊いた。そしてその中から二揃ひ持ち出して來た。

「いかゞでございませう、このお品では。それからお洗濯なさいます間別のが

お入用だと存じますが。」

「さうね、ぢや二つ戴きませうよ。」と婦人客は白手套の二つを購ひ取つた。

「今一つこんなのを御覽に入れたいと存じますが」

紳士は先刻の棚から別の手套を持ち出して來た。「御覽の通り、これは鼠色でご」ざいますが、お劇の畫興行やお寺詣りにはこの方がお似合ひかと存じまして、何ならこれも二揃ひばかりお持ちになりましては。」

婦人客はその鼠色の手套をも、言ひなり通り二つ購はされた。たつた一つの手套が買ひたさに店に入つて來たものが、出る時には四つの手套を提げてゐた。それもほんの十分間の出來事に過ぎなかつた。

お客が歸つてゆくと、賣子娘はすつかり感心したらしく言つた。

「まあ、お上手だわね、貴方これまで屹度どこかの賣子だつたんでせう。そしてお店へ雇はれたくつて、今日往らしつたのぢやなくつて。」

「さうかも知れません。」

紳士は外套と帽子とを受取りながら言つた。そして紙入から自分の名刺を取り出して娘に呉れてやつた。夫を見ると娘は仰天して酸漿のやうに眞紅になつた。紳士は擬ふ方もないワナメエカアの主人だつた。

悟道

近頃碧巖錄とか、無門關とかいつたやうな禪家の書物に、所謂悟道を商賣にしない、素人の學者、求道者が飛び込んで往つて、新しい解釋を試みようとしてゐるのは面白い現象である。

鳥尾得庵といへば、軍人で出先きを塞がれた腹癒せを、禪學にぶち込んだ程あつて、胡椒のやうにひりゝとした禪機の鋭さにかけては、其の頃の居士仲間の隨一であつたが、ある時その居士の玄關へ立つて、牛のやうな太い聲で案内を

頼む者があつた。

取次ぎの書生が出てみると、玄關には、瓦で拵へたやうなお粗末な坊さんが一人衝立つてゐた。

「拙僧は北國の雲水でござるが、得庵先生御在宅なら、暫く御意を得たいと思ひまして……」

坊さんは恁う言つて、人形のやうにぎくりと頭だけを下げた。その風が餘り可笑しかつたので書生は思はず笑はせられた。

「折角のお訪ねでございますが、主人は昨今所勞中で、どなたにもお目に懸りません。」

大抵の客は、皆この口上一式で追ひかへす事になつてゐるので、書生は早口にすら〳〵と言つて退けた。

お粗末な坊さんは、汗ばんだ額へ掌面をやつて、じつと考へ込んでゐたが、急

に獣のやうな悪意のある眼で書生の顔を見た。

「實は居士にお目に懸けたいと思つて、天よりも大きい編笠を持參いたしてゞさるが、如何取り計らひませう。」

蛇の目の唐傘だつたら、書生は自分のにする事を知つてゐたが、編笠では使道に困つた。で、兎にかく奥へ入つて居士に譯を話してみると、居士は狼のやうな顔に、にやりと薄笑ひを浮べた。

「どこぞ其邊に捨ておけと言つてやれ。」

書生が玄關へ出て、致へられた通りに然う言ふと、坊さんは背に括りつけた編笠の紐でも解くやうな眞似をして、その儘出て往つた。書生は鼻を鳴らして感じた。坊さんも坊さんなら、居士も居士だと思つた。で、狗のやうに次ぎの室に蹲踞つて譯を訊くと、居士はけろりとした顔で言つた。

「乃公は何も知らんよ、編笠を持つて來たといふから、捨てゝおけと言つたまでぢやないか。」

書生は悟りもい、加減なものだと思つた。そしてそれ以來いつも迷ひ續けてゐる。

入場料の儉約

アルマ・グラック女史といへば、米國で名高い高調子の歌手で、歐羅巴の本場仕込でなくて、グランド・オペラの一流株になつたのは、女史が皮切だといふ、米國ではちやきちやきの歌手である。

いつだつたか、女史がミシガン州のある市に演奏に出掛けた事があつた。何しろ名高い高調子の歌手が顔出しをするのだといつて、市は引くりかへる程の騒ぎだつた。一體音樂といふものは、いろんな藝事のなかで、一等解り難いものだが、那を解らないといふと、馬に比べられる心配があるので、大抵の人は辛

抱して解つたやうな顔をしたり、面白い面白いといつて騒ぎ廻つたりするものだ。

演奏のある日の午過ぎ、アルマ●グラック女史は、好きな菓子を買ひに大通の店屋に入つて往つた。番頭は朋輩を相手に頻とその晩の演奏會の事を噂してゐた。

「演奏會といへば、大した人氣ださうぢやありませんか。」女史は何喰はぬ顔をして口を出した。

番頭は初めて氣が注いたやうに、身裝のりうとした此の婦人客を見た。

「どうも素晴しい人氣でございますよ。」

「貴方も今晩は入らしつて？」

女史は世間並の挨拶などするには惜いやうな美しい聲で言つた。

「へい、參り度いとは思つてゐるのでございますが——」

番頭は一寸頭へ手をやつた。「實を申しますと、音樂は餘り好きでもございませんが、唯噂の高いアルマ●グラックさんといふ方のお顔を見たいと思ひましてね。」

「それぢや、眼をあけてようく御覽よ。」女史は幾らか中つ腹の氣味で、鷲鳥のやうにぐつと首を前に突き出した。「そして入場料だけ儉約しとくといゝわ。」

番頭は呆氣に取られて、女客の顔を見た。そして此の女が其の晩の名高い歌手である事に氣が注くと、じつと眼を皿のやうに睜つた。——で、言はれた通りに入場料だけは儉約をする事にしたさうだ。

座頭と花形俳優

松本幸四郎——といつても常劇の舞臺に立つてゐる今の幸四郎ではない。ずつと古の幸四郎である。——が、ある時芝居の初日がはねて家に歸つて來た。そ

して長火鉢の前に坐つて、女房を相手に酒を飲みながら、今日の舞臺の出來を彼是取沙汰してゐた。

すると、表の格子戸を勢ひよくがらりと開けて、内弟子の一人が歸つて來た。弟子は長火鉢の前の師匠を見ると、いきなり浮いた調子で二三度自分の頭を叩いた。

「お女房さん、お喜びなせいまし、今度の芝居に内の親方の評判と來たら、それは〳〵素敵なもんでげすぜ。わつちやあ、氣に懸つて仕方がねえもんだから、今も今とて打出しの見物衆に交つてね、皆の評判を聞いて歸つたんでげすが、十人が十人「どうだい、今度の幸四郎の出來は」と言つて、賞めちぎつてゐまさあ。」

弟子は早口に恁う言つて、態とらしく雀のやうな恰好をして踊つてまで見せた。

幸四郎はそれを聞くと、急に氣難しい顔をした。そして弟子のふざけた振には

見向きもしないで、ちびりちびり盃の緣を嘗めてゐた。

「何だつてそんなに不機嫌な顔をしてゐるの。」女房さんは纖細な手先でお銚子の加減を見ながら心配さうに言つた。「今聞けばお前さんの評判が一番好いといふぢやないの。」

「あゝ、困つたな。今度の芝居は極つて不入だわえ。」

幸四郎は女房の言葉は、まるで耳に入らぬらしく、獨語のやうに呟いた。

「え、不入だつて、今度の芝居が。」女房さんは咎め立てをするやうに怖い目つきをした。「戯談もいい加減にしてお置きよ、今日は初日だつてえのに、緣起でもない。」

「お前達には判らない。」幸四郎は盃を猫板の上に置きながら、弟子の顏にじつと眼を見据ゑた。弟子はいつにない師匠の不機嫌に、先刻のふざけた眞似とは打つて變つて神妙に鼠のやうに小さくなつてゐた。幸四郎はぽつり〳〵した口

調で譯を話した。その言葉によると、今度の芝居の花形は誰が何といつても半四郎と三津五郎の二人だ、この二人が評判がよかつたら、芝居は大入に極つてゐる。それだのに自分がそんなに評判を立てられるといふのは、この二人に好い點がないに相違ない。座頭役、敵役の評判では見物は來ないものだといふのだ。

今の鴈治郎や歌右衛門なども、よく〳〵この言葉を味はつて貰ひたい。そして精々一座の花形俳優に花を持たすやうに振舞つて欲しい。これは唯り俳優に限つた事ではない、原敬氏なぞも自分が評判を取らうとしないで、同じ閣員の花形俳優を引立てるやうにしたら、内閣も割合に無事に持續ける事が出來よう。

ショベンハウエル曰く好い俳優はよく端役をしてゐるものだとさ。

詩人の健啖

話はずつと古くなるが、伊太利の詩人ダンテが、ある時カアネ●デラ●スカラ家の食事に招かれた事があつた。——世間の娘を持つた親達に告げておく。皆さんの知合にもしか詩人があるなら、精々御馳走する事だ、詩人は食卓で親達に色々のおもしろい談話を聽かせてくれるばかりか、娘には激しい戀を敎へてくれるものだ。

ダンテは好いお客だといふので、わざ〳〵其家の主人と子息との間に坐らせられた。その頃は食事の時に、主人も客も食べ殘りの骨を卓子の下に打捨らかしておく習慣があつたので、惡戯好きのカアネ親子は、目ざとい詩人に氣づかぬやうに、自分達の皿の骨は言ふまでもなく、他のお客のをまで、そつくりそのまま盡そつとダンテの足もとに捨てゝおいた。

さて食事が濟むと、主人は初めて夫に氣づいたやうに皆の顏を見た。

「皆さん、私はダンテ君の胃の腑が、馬のやうに御丈夫なのにすつかり驚いて

しまひました。お疑ひになるなら那を御覽下さい。」

主人はダンテの脚もとを指ざした。皆は卓子の下を覗き込むだ。そこには食べ殘りの骨が山のやうに積まれてあつた。

「ほほう。驚きましたな。では、これから一つ詩人の健啖を祝さうぢやありませんか。」

お客の一人が言ひ出したので、皆は起ち上つてダンテの胃の腑のために杯をあげようとした。

「お待ち下さい。皆さん。」ダンテは兩手で皆を押へつけるやうな眞似をした。

「あなた方は私の健啖のいいのに吃驚なすつていらつしやるやうですが、私はまた當家の御主人の胃の腑の廣いのに驚嘆してゐるやうな始末で。御覽なさい——」と詩人は主人の脚もとを覗き込んだ。「御主人の卓子の下には何一つ殘つてゐません。私は恁うして骨だけは食べ殘しましたが、御主人はその骨まです

つかり鵜呑みにされてしまひました。」

皆は詩人の頓智のいゝのに嘆賞を惜まなかつた。語を寄す、世上の健啖家、頓智さへよかつたら、諸君は六人分の飯を食つたつて少しの差支もない。

女商人

蘆花德富健次郎氏が、ながい間の修道的閉居から、久しぶりに、柴の扉を開けると、いろんな訪問客が毎日ぞろぞろ詰めかけ出した。そのなかに、氏の原稿を貰つて一儲けしやうと目論みを立てゝゐる出版業者も幾人か交つてゐた。

さういふ輩のなかに、たつた一人の女商人があつた。幾度か面會を謝絶られても、性懲りもなくまたやつて來るので、德富氏も流石に氣の毒になつて會つてみる事にした。

その人は兩國橋詰のある書肆の女主人だつた。

「お忙しいところを、お邪魔にあがりまして相濟みませんが……」女商人は丁寧にお辭儀をした。頭の下げやうが、どこか婦人雜誌の口繪によく肖たやうな點があつた。「先生のお書きになつたのを、一度私どもでも出させて戴きたいと存じまして。」

「私の書物が出版したい？」德富氏はこの頃髭を剃り落したばかりの頤を撫ながら、子供のやうなくりくりした顏をして言つた。「何故ですか。」

「お金が儲けたいんです。先生の御本を出させて戴きますと、お金がどつさり儲かりますやうに承はりましたから。」

女商人は恁う言つて後れ毛を撫であげた。そして自分でも幾年か往時、男の膝にもたれて、「あなたの鼻は低いのね」と言つた以來、これほど眞實の事を言つた事は無かつたと思つたらしかつた。

「なぜ、そんなにお金が儲けたいのかね。」

德富氏は不思議さうに訊いた。

女商人は答へた。

「商賣をも一層手弘くやつて往きたいと思ひますし、それに妙齡の娘も一人ございますもんですから。」

「娘がお有りだつて。」德富氏は雌鷄の羽がひ下に卵を一つ見つけた折のやうに聲をはづませた。「夫ぢや原稿をあげない事もないが、其代り茲に一つ條件がある。」

「條件と仰有いますと……」

「あなたも知つて居るだらうが、麴町に金尾文淵堂といふ書肆が居る。あすこの主人に娘さんを娶さないかね。さうすると、きつと私の原稿をあげる。」

德富氏はにこりともしないで言つた。文淵堂の主人といふのは、淺草の觀音樣を自分の戀人として毎夜お詣りをする外には、何一つ浮いた事もなく、四十の今日

まで童貞を守り通して來た風變な商人で、德富氏とは長い間の近づきであつた。

「思召は有難うございますが、いづれよく考へました上で。」

女商人は恁う言つて歸つて往つた。そしてそれ以來二度と原稿を貰ひに粕谷の村へ出て來なくなつた。

その後德富氏が兩國橋を通ると、橋詰の書肆の店で、見覺えの女商人は客を相手にせつせと働いてゐたさうだ。——よい考へで、お金が儲けたかつたら、働くに越した事はない。

女房の手紙

亭主といふものは、女房を里歸りさせるか、それとも自分が遠くへ旅立でもしなければ、滅多に女房の手紙を讀む機會に出會さない。だから、もし自分の宅で女房から手紙を投げつけられるやうな事があつたら、大抵の亭主は、小鳥の

やうに顫へあがるに極つてゐる。

米國は紐育のある大會社の社員が、先日の事出勤時間が來たので、慌てて家を飛び出さうとすると、戸口で女房に呼びとめられて一本の手紙をつきつけられた。

「貴方、これを會社へお着きになつてから讀んでみて下さい、途中で御覽になるんぢやありませんよ。」

女房はいつになく眞面目な調子で言つた。

亭主はぎよつとして手紙を受取つた。そして何か訊き返さうとして口をもぐもぐさせてゐたが、ふと時計の針が目に入ると、その儘慌てて飛び出した。そして途々手紙の封を切らうとして、幾度かポケットに手を突込んだが、その都度女房の言ひつけを思ひ出して、それなりポケットの奥へ押し込んでしまつた。——實際女房の言ひつけと、藥の處方箋とは、言葉通りに解釋した方が、

男にとつて危險が少かつた。

會社の入口を入ると、男は急いで手紙の封を切つて讀み下した。

「貴方に御心配を掛ける事だとは知つてますが、私としてはお話し致さなくては濟まされません。それは私の義務なんですからね。私は先日中から、こんな事になるだらうと思つてましたが、今日まで凝と辛抱して來ました。所がとうと大變な事になりました。私はもう隱してばかりは居られなくなりました。愈愈あけすけに申し上げますから御免下さい。貴方は夫をお聞きになると、屹度顯へ上つておしまひになります。‥‥」

「いよ〳〵お互の身の破滅だ。忍び男でも出來たんだな‥‥」と思ふと、男の髪の毛が逆立になるやうに思つた。そして急いで後を讀み次いだ。

「あなた、石炭がもう悉皆になりましたのよ。どうか正午までに宅に屆けて吳れるやうに電話をお掛け下さいな。——吃驚させて濟みませんが恁っでもしな

けりや、貴方がお忘れになると思つてね。」

男は吻と息をついた。そして早速電話をかけて石炭を催促した。で、物の十分も經つと、男は急に元氣づいて、石炭が無くて女房がゐるのと、女房が居なくて石炭がうんとあるのと、どつちが男にとつて暖かだらうかなどと、そんな大それた事を考へ出した。

女房の通辯

＊＊商事會社の重役M氏は、ながく米國へ渡つてゐて、那地で會社の地位を据ゑたのは、全く斯の人一人の骨折だと言はれてゐる男である。それだけにM氏自身も米國にはかなり深入りしたと見えて、夫人には、髪の毛の金色な米國婦人を迎へてゐる。

結婚をした男といふ男は、大抵みなアダムを羨ましがるものだ。何故といつ

て、彼にはイヴの阿母といふものが居て、絶えず口うるさく世話を燒く心配が無かつたから。實際男にとつて、女房の里方のおせつかい程小うるさいものはないが、夫を思ふと、M氏が米國婦人を妻に迎へて歸つたのは悧巧な仕方だつた。

女房の里方が日本に無いのを忘れないM氏は、ちよい〳〵夫人を連れて、あちこちと旅をする。そして何處と當所もない折には、日光へ往く事に定めてゐる。日光と藝者とは西洋人にとつて日本の二大驚異であるが、藝者は夫婦者にとつては、山よりも險呑な所が多いので、M氏は夫で日光へ往く事に定めてゐるのだ。

ある時日光へ往つての歸途に、夫人は誰かに買つて歸るつもりで、土産物を賣つてゐる一軒の小店へ入つた。M氏は卷葉を咥へたまゝ後からのつそり從いて往つた。夫人は番頭が取り出して來る色々な土産物を弄くりまはしてゐたが、

そのなかから通草蔓の手籠を二つ三つ買ひ取つた。

夫人は財布を出して、言はれるだけの金額を拂つた。その金は基督教信者のM氏が、聖書に書いてある事と、書いてない事とを巧く按排して商賣するので儲かつた金の一部分であつた。

M氏は相變らず葉卷を咥へたまゝ、夫人の後からのつそりと店を出やうとした。すると後から低聲で

「もし、もし。」

と呼ぶ者がある。見ると番頭だ。番頭はたつた今夫人に見せた叮嚀な素振とは打つて變つた氣取つた態度で

「僅ですが・・・」

と言つて、幾らかの金錢をM氏の掌面に握らせた。

M氏は會社のため使ひ盡して、近ごろ幾らか輕くなりかけた頭を傾けた

「ははあ、俺を通辯と間違へたな、女房がアメリカ人だもんだから。」

然う氣がつくと、氏は輕く頷いて、その小錢をその儘自分の懷中に納めてしまつた。そしてこんな不意な儲けをするのも、自分の女房の見立が善かつたからだと思つて、滿足さうに煙をぱつと鼻の穴から吹き出した。

詩人の握手

スキンバアンといへば英國の名高い詩人だが、その愛讀者の一人に、何とかして一度この詩人と握手して、その心持を一生の自慢にしたいと思つてゐた男があつた。

その男は、詩人が毎朝のやうに其邊の森へ散歩に出かける辯があるのを聞いたので、度々こゝぞと思ふところへ待伏せして、漸と一週間目に、かねて寫眞版で顔貌の斯の詩人が、向ふからてく〳〵歩いて來るのに出會す事が出來た。

其の男は樹蔭から獵師のやうに飛び出した。そして慌て、帽子を脱いだ。

「ちよいと伺ひますが、あなたはスキンバアン先生ぢやありませんか。」

詩人は變な顔をして、一寸うなづいた。

「それぢや、どうか握手させて戴きませう。」

男は脂ぎつた掌面を前に差し出した。その掌は詩人と握手するよりも、熊と摑み合つた方が恰好なと思はれる程大きかつた。

「うむ……」と詩人は呻くやうな聲をして、少し後退りした。まるで見知らぬ男の掌面に怖氣づいたやうだつた。その瞬間、件の男は詩人が聾だつたのに氣がついて、一段と聲を張りあげた。

「先生、私はあなたに握手がして戴きたいばかりに、一週間ばかし毎日のやうにこゝでお待ち受けしてたのでございます。」

「あ、、さうでしたか。」詩人はにやりともしなかつた。そして痩せた手を出し

て、其の男の大きな掌面を握つたが、その一刹那小娘のやうに心持顔をぽつと赧くした。

「私はこんな事には馴れてないものですからな。」

百圓札

國民黨出の政論家U氏は、多くの議論家と同じやうにいつも貧乏である。いつだつたか氏の家に國民黨の犬養毅氏が訪ねて來た事があつた。犬養氏は劍術使ひのやうな凄い眼つきをして狹いU氏の宅を物珍しさうにきよろきよろ見廻してゐた。

そのかへり途に、犬養氏は國民黨本部へ立ち寄つた。そして乾魚のやうな痩せた體軀をぐたりと椅子の上に下すと、居合はせた黨員の誰彼を見て言つた。

「蝸廬といふ語があるね、僕も書物のなかでは、よくこの語に接してはゐるが

今日は眼の前に出蝸廬といふものを見て來たよ。」

「へえ、どんな者が住むでゐました。」

少し小金を持つてゐるらしい黨員の一人が不思議さうに訊いた。

「國民黨員が住むでゐたよ。名前はU――と言つたつけ。」

犬養氏は劍術使ひのやうな眼尻に皺を寄せて笑つた。

そのU氏がある時國民黨の本部が蟹のやうに頻りと泡を吹いてゐた事があつた。

「柏原文太郎つて、ほんとに失敬な奴だ、僕はあんな非紳士的な男をまだ見た事がないよ。」

「非紳士的つて、どんな事をしたんだい。」

居合せた黨員の一人が訊いた。此男の考へでは、馬が後脚で人を蹴る外には、非紳士的な態度といふのはないといふのだ。

U氏は眼をくしやくしやさせた。

「それを聞いたら誰だつて怒るよ。」

「どんな事をしたんだい。」今まで背を向けて何か考へてゐたらしい同じ黨員の大内暢三氏は、眞面目になつて振り向いた。

「柏原がそんな不都合をしたのなら、僕が君に謝らせてもいい。」

「不都合だとも。ひどい不都合さ。」U氏は泣き出しさうな顔をして言つた。「彼の男は僕の眼の前で金を勘定したんだよ。しかも百圓札でね。」

「札勘定をしたんだね、百圓札で。」皆は顔を見合はせた。「そりや成程柏原が悪い、君にそんな物を見せるなんて。」

皆は柏原氏が悪いと極めてしまつた。實際それはよくない、貧乏人に百圓札を見せつけるなんて、富豪に拳銃をおつつける以上に罪がふかい。何故といつて、富豪は懐中に手を突込んで相手を宥める術を知つてゐるが、貧乏人は赫と

なるより外には仕方がないのだから。

お祖母様と黑猩々

最近西部戰線で、獨軍の砲彈の破片に擊たれた佛蘭西娘の一人が、巴里の病院に收容された。傷は程なく癒えたが、困つた事にはすつかり記憶を失くしてしまつて、何を訊いても返事一つ出來なかつた。

「阿父さんの名は何といふの。」

醫者は猫のやうな物柔かな聲で訊いた。娘は睫毛一つ動かさうとしなかつた。

「それぢや、阿母さんは何といふの、覺えてゐるだらう。」

醫者は娘の顔を覗き込むやうにして訊いた。娘はつんと澄ましきつて外つ方を向いた。

醫者は何とかして口を利かせたいものだと、頭を絞つて色々の手段を試してみ

たが、小娘は髪の毛一つ動かさない濟ました顔で、石のやうに默りこくつてゐる。恁うしてさんざ焦慮しぬいは末、

「馬鹿！」

と、一聲喚きでもしたら面白かつたのだが、小娘は實際醫者の馬鹿なのを知らなかつたかして、いつ迄も默りこくつた儘で居た。

醫者はとうと善い事を考へついて、小娘を動物園に連れて往つた。人間に出來ない事で、動物には手もなく出來る事がよくあるものだ。小娘は獅子を見た。虎を見た。新聞記者のやうに忙しさうにしてゐる豹を見た。辯護師のやうに喋舌くつてゐる小鳥を見たが、何一つ興味を牽かなかつたらしく、相變らず生眞面目な顔を仕續けてゐる。

失望した醫者は、最後に小娘を連れて、黑猩々の檻の前に立つた。猩々は手に食物の碎片を持つて、お婆さんのやうに留り木の上に、ちよこなんと坐つてゐた。實際べたんこな鼻の格好から、黑味がちな圓まつちい眼は、お婆さんそつくりだつた。

小娘は猩々を見ると、いきなり檻に駈け寄つた。そして獸の唸るやうな聲で、

「お祖母ちやん、お祖母ちやん……」

と呼び立てながら、懷かしさうに顔を檻に擦りつけた。猩々はそれを見ると、自分が親身のお祖母さんでゞもあるやうに、留り木からのつそり降りて來た。そして△の内から手を伸ばして娘の肩を撫た。娘は嬉しさうにきやつ〳〵輕躁ぎながら、色々な事を猩々に話しかけた。猩々はまた默つて小娘のお喋舌に耳を傾けてゐたが。暫くすると、娘をいたはるやうに手に持つた食物の破片をそつと吳れてやつた。

それ以後啞のやうだつた小娘は、また物を言ひ出した。だが、話す事といつたら、唯もうお祖母さんと、黑猩々の事ばかしである。——實際氣の毒な話だ

が、お祖母さんにだけはそつと内證にして置きたい。さもないと、腹を立てるかも知れないから。

婦人記者

ある秋、徳川家達公が夫人と一緒に關西旅行をしてゐた時の事、某新聞の婦人記者が、汽車訪問に神戸驛から同じ客車に乘込んだ。禮儀正しい公爵夫人は、紅雀のやうな可愛らしい口もとをして、二言三言記者の問ひに答へてゐた。無論紅雀同志の事だ。精々撒き餌の粟粒か卵の事でも話し合つてゐるらしかつた。

先刻から少し離れた客席で、其の日の新聞紙に讀み耽つてゐたらしい公爵は、ちらと婦人記者の顔を見るなり、不思議さうに二人の會話に聞耳を立てゝゐたらしかつたが、暫くすると、讀みさしの新聞を手に持つたまゝ、公爵夫人の側

にすり寄つて來た。そして重々しい聲で口を切つた。

「あなたが婦人記者かな。」

公爵は南蠻から獻上物の小鳥でも見るやうに、しげしげと女記者の身體を見廻した。「社にはあなたの樣な方が幾人も居られるのかな。」

婦人記者は紅雀のやうに一寸嬌態をした。

「はい、幾人もゐらつしやいます。」

その實はたつた一人しか居なかつたのだが、婦人記者は將軍家といふものは、往時から眞實の事を聞馴れないものだといふ事を思つて、つい一寸掛値を言つてみたのだつた。

「ふふむ。」

公爵は上品な鼻を笛のやうに鳴らして、その儘默つてしまつた。

米國にゼエムス・リレエといふ詩人がゐる。ある時ボストンへ出掛けて行つて

ホテルへ泊ると、すぐ電話が懸つて來た。出てみると、相手はなにがし新聞社のジョオンス孃といふ婦人記者だつた。

婦人記者は美しい聲で、この文人がボストンに來た用向きから、其最近の作物や生活方までこまめに聞き訊した。リレエは丁寧に一々夫に返辭をした。すると、最後に婦人記者は訊いた。

「昨今奥樣はどちらに入らつしやいます。」

「妻ですか、妻なら多分この電話の片つ方に懸つてるかも知れませんよ。」

詩人は世界の端までも聞えるやうな聲で返事をした。すると、矢庭に受話器を叩きつけるやうな音がして電話は切れてしまつた。

リレエは聞えた獨身者である。

知行取

京都の富岡鐵齋氏のところへ、先日宮内省の屬官某といつて四十男がひよつくり訪ねて來た。屬官は山鳩のやうにぐつと胸を反して座敷に通つた。

鐵齋老人は耳が遠いからといふので、息子さんが代りに會ふ事になつた。屬官はちよつぴりした口髯を捻り上げながら、精々勿體をつけて用事の趣を傳へた。――用事といふのは、本省で何かに使ふ木標の文字を鐵齋翁に書いて貰ひたいといふのだ。

「彼是人選の結果が、とうと御老人が指名せられる事になりました。何しろ一代の譽といふものです。一つ奮つて御揮毫が願ひたい。」

屬官は恁う言つて、またしても勿體らしく髯を引張つた。肉の薄い唇は蛙のやうな口元になつた。

「いや有難い仕儀で……」と息子さんは叮嚀に頭を下げた。

「ですが、あなたの方にはHさんといふ立派な書家がいらつしやるぢやありま

せんか。」

「Hさんですか・・・・」と屬官は相手の高い鼻を見た。

「Hさんは無論居られますが、お仕事の方がつい忙しいもんで・・・」

「いかさま・・・・」東洋史を專攻した息子さんは、だぬしけに東洋中に響き渡るやうな宿高な調子で言つた。屬官は吃驚して目を圓くした。

「忙しいといへば、宅の老人なども貧乏閑なしで、迚もお望みに副ふ事は難しからうと思ひますよ。」

「でも御座らうが、政府の御用で、此の上もない御老人の御名譽といふものですから・・・・」屬官は何でも名譽の一點張りで押しつけやうとする積りらしかつた。「御承知の通り、政府の事ですから、別にお禮といつては出ないが、其代りいつ迄もお家の譽れになる事でせうよ。」

癇の強い東洋史の專門家はにやりと笑つた。

「ぢや、手つ取り早く言つたら、其筋の御用だから、唯働きしろと仰有るんですね。」

「ま、そんなものです。何しろ政府の御用で、名譽の次第ですからな。」

「ぢや、一寸伺ひますが・・・・」東洋史の專門家は皮肉に出た。「貴方方は、しよつちう政府の御用を仕てゐられる名譽の御境涯だから、別に知行なぞはお貰になりますまいな。」

「さ・・・・」と屬官は行き詰つたやうな顏をして、知行の有無を一寸考へるらしい風だつた。夫に何の無理があらう、考へでもしなければ思ひ出せない程、ちよつぴりした知行取だつたのだから。